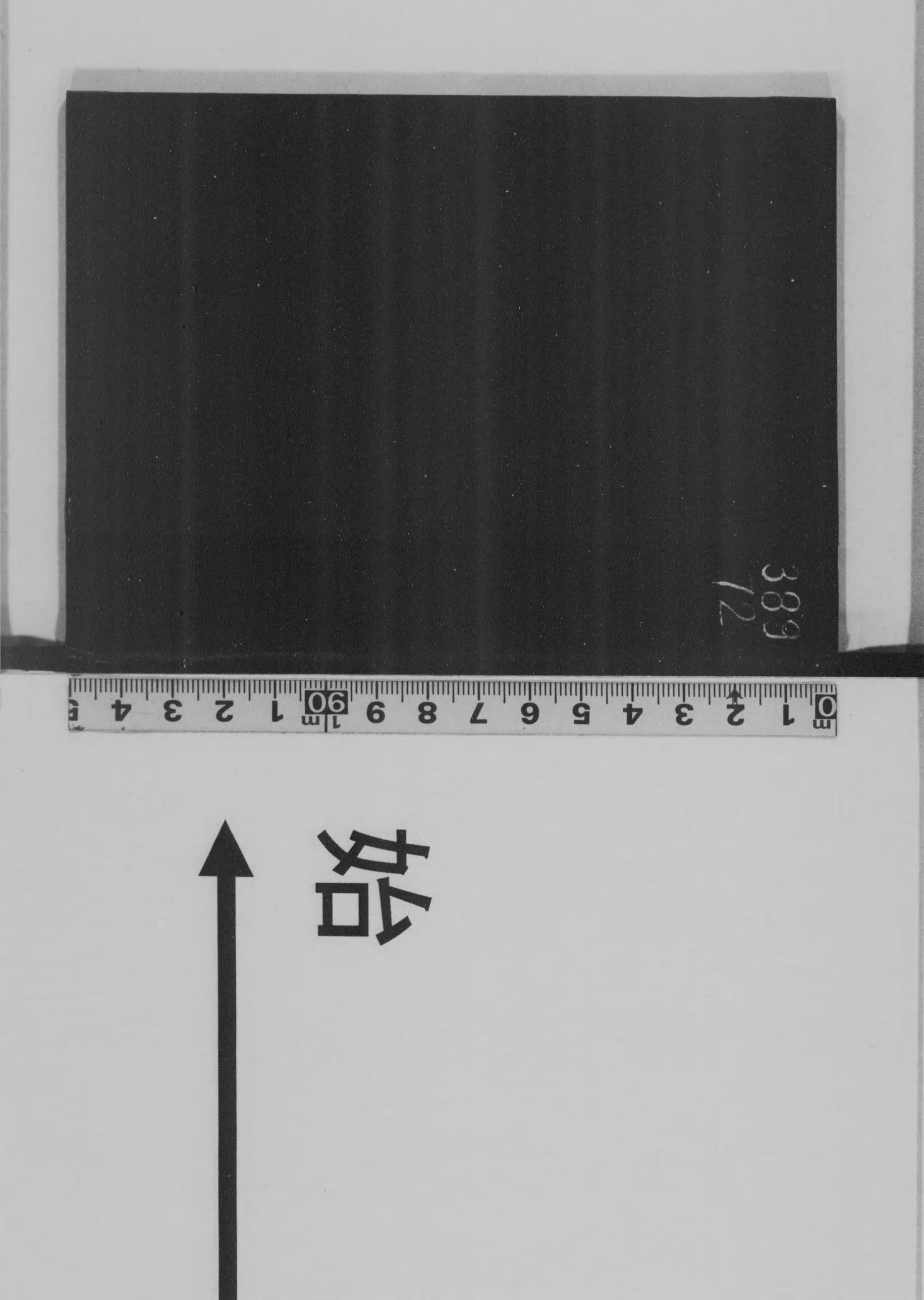
386
12
北

389-72

曾我の家五郎著

曾我の家五郎喜劇全集

第十五編

株式會社 大鐙閣刊

大正
11. 10. 4
内交

曾我の家五郎喜劇全集　第十五編

目次

一　辻占……二
高津繪馬堂茶店の場……三
二　女蛇の目……四一
京都鴨川附近先斗町の場……四二
三　忠臣藏裏の裏……六三
一　七段目一力樓裏口の場……六六
二　同　一力樓座敷の場……七九
三　五段目の場……九五
四　瓜　二つ……九九

目次

中山隱居宅の場……一〇〇
五　停　電……一三一
某電車停留場交叉點の場……一三四
六　當りくじ……一六一
一　尾張屋店先の場……一六四
二　高津松雲寺玄關の場……二一八
三　初湯稲荷神社の場……二三六
七　達者な病人……二五一
花岡病院病室の場……二五三
八　球の行衛……二〇三
休職陸軍工兵大佐福田喜作邸の場……二〇五

目次終

辻占

【一場】

はしがき

好劇家蘭華庵主人から戴きました變り種素人料理と思へぬ美味さ夫れを私一流の甘ひ辛ひ鹽加減お仕まいまで召し上つても胸につかへぬお笑ひの積りで御座りまする。

著者しるす

高津繪馬堂茶店の場

登場人物

【俳優】

茶亭　聾の嘉兵衛　蝶八
同人女房　おかじ　大磯
青年畫家　古田市香　一郎
相場師　松井卯之助　五郎
同人娘　喜久子　林蝶
宗匠　田邊幸齊　五樂
ペンキ屋　由兵衛　致雄
其の弟子　榮公　勢蝶
通行人米屋　五良丸
同學生　辻占　時六

辻占

同自用車夫　蝶次郎
同仲士　保
同職工　時太郎
同丁稚　五市
同商人　十童
同其の妻　一福
同洋服の紳士　祐三郎
同和服の紳士　五六
同粋な株屋　蝶六
其の女房　時和
女かみ結　壽蝶
同僧侶　三郎

同紙屑屋　蝶七
同盲唖學校生徒　蝶の丸
新婚の紳士　小次郎
其の・妻　胡蝶
實業家　笑將
其の妻　二三雄
同番頭　十一
同手代　一雄
同紙屑拾ひ　長佐久

高津繪馬堂茶店の場

辻占

本舞臺平舞臺上手稍々大なる茶店其の上手に二重家體小格子手摺附きの窓に障子、正面は奥へ通じる緩簾掛けの出入口、下手は茶釜其の他竹棚にビール、サイダ及びコップ其他の食器類と美しき廣告びらを二三釣るす、庇より竿に釣せし大提灯に『きのめ茄子田樂』と記す、小家根の上にペンキ看板中央に朝日ビールのマークのみを、記して有る、下手は大阪市を見たる繪馬堂澤山な繪馬を上げ二脚の一間の床几を其の中に置く、茶店の下手に自働辻占機有る、總て高津繪馬堂茶店の體此の模樣にて賑かに幕開く。

ト上手のペンキ看板に由兵衛はペンキ屋の親分の拵へにて英字にてASAHIBEERとマークの上に書いて居るケタツの下に弟子榮公は小僧の拵へにてペンキ入を持つて立つて居る、米屋、學生、自用車夫、仲仕、職工、女學生、丁稚、女かみ結等各自指定の拵へにて其の看板を見て居る紳士は少し離れて同じく見て居る繪馬堂の中にて紳士の妻の拵にて林檎の皮を剝ひて居る、看板を見て居る人々は各自捨白詞にて褒めて居る、處へ中より茶店の亭主聾の嘉兵衛出て來り。

嘉兵衛「これ〳〵皆往來しなされ、見せ物ぢやない〳〵、お前方が恁う澤山此處に居られては、休むお客も休まんがな、彼方へ行き〳〵」

米　屋「其麼事を言わんと見せていな」

嘉兵衛「なんぼ宜い天氣でも雨雲がチラ〳〵出て居るがな」

職　工「オイ米屋はん此のお爺聾やがな」

米　屋「アツ奴聾かいな、○聾の癖にボン〳〵言うない」

嘉兵衛「其れは爾うでも早う行きなされ」

一　同「あゝ聾や〳〵」

ト各自捨白詞にて、からかいながら嘉兵衛の顏を覗き込んで笑ふ、嘉兵衛は聾拳斗りうつて頭を下げて居る、各自は面白そふに、からかう由兵衛は見兼て筆を止めて。

由兵衛「宜い加減に嬲ぶつてやれ・聞いて居られんわへ、聾が怎うしたのぢやへ」

ト叱られ皆々囃子に連れて米屋仲仕學生は上手へ、車夫女學生丁稚職工は下手へはい

る。

「ヲイお前さんも早ふ往來しなはれ」

ト紳士に云ふ。

紳　士　「僕は此處の客だよ」

由兵衛　「お客さんですか。ヲイ御亭主御客さんやで」

嘉兵衛　「サア〳〵第一此の男が一番不可んわいな。ヲイおまはん彼方へ行き〳〵」

榮　公　「これお爺さん此のお方お客さんやぞ」

嘉兵衛　「サア夫れを言うてるのぢや、此の人聞こえんのかいな一寸聾やぞ」

紳　士　「何にを言やがるのぢやい、聾は貴樣ぢやないか」

嘉兵衛　「其麼急用が有るなら、早う通りなされ〳〵」

紳　士　「貴樣に其麼命令を受ける必要は無いのだ。ヲイ行かう」

女　房　「行きませふ〳〵、阿呆らしい茶店のお爺にボロクソに云われて、休んでる

必要はおまへんわ」

ト立上り紳士の傍へ來て云ふ。

紳　士　「全くだよ怪しからん」

嘉兵衛　「ハアンお前方御馴染かいなア」

紳　士　「馬鹿ツ、夫婦だい」

嘉兵衛　「夫れは珍らしい人に逢ひなさつたな」

女　房　「阿呆かいな、初まりから二人連れやがな」

紳　士　「捨て〻置け〳〵。サア行かう」

嘉兵衛　「左樣なら」

ト叮嚀に頭を下げる紳士夫婦は下手へ這入る榮公は嘉兵衛の傍へ來て。

榮　公　「お爺さん錢貰うたのかいな」

嘉兵衛　「サア珍らしい人に逢ふたらしいな」

榮　公「あツ丸損しているのぢやがなハ、、、、」

嘉兵衛「アハ、、、」

由兵衛「ヲイ榮公水持つて來い」

榮　公「ヘイ――」

ト笑ひながら榮公は茶店内へ這入る嘉兵衛は盆抔を片附けて同じく内へはいる、同時に花道より新婚の若夫婦、紳士の拵へ後より妻君は奥様の拵へにて出で來り花道にて

妻「ねえ貴方御みくじは怎う出たのですのよ」

紳士「女の子と出たのよ、初めだから男の子が欲しいな」

妻「私も爾う思うのです、チョイと向ふに辻占が有りますからモウ一度占つて見ませうよ」

紳士「ヲ、それがいゝ〳〵」

ト宜しく本舞臺へ居直り捨白詞にて妻君は辻占を五錢入れて出す。

妻「一寸貴方讀んで下さいな」

紳士「ヨシ。萬事吉、旅立ち宜し・商賣繁昌利有り、安産男の子なり。ヲイ男だよ……」

妻「まあ嬉しいわねえ」

紳士「お前より僕の方が嬉しいよ」

妻「之れで貴方の浮氣も止まりますわね」

紳士「お前を捨てゝ誰れが浮氣をするものかねえ」

妻「デモ心配ですわ・命掛けで夫婦になつたのですもの」

紳士「夫りや俺れだつて其の通りサ」

妻「あら甘い事斗り」

ト抓める。

紳士「あツイタ、、、」

ト此の樣子を、由兵衛は美ましげに凝然聞いて居て思はず『命がけで夫婦になつたのです
もの』と看板に書く、此の時初めて。

由兵衛「ウワ――」

ト大聲を出す紳士夫婦は驚いて。

紳　士「ヲヤ〳〵あんな處に人が居るよ。君偉ひ處を見せたね失敬〳〵」

ト看板に氣も附かず捨白詞にて上手へ這入る同時に茶店の中より榮公は小さきバケツを持ち來りて。

榮　公「貴方だすか親方・今ウワーなんて大きな聲を出しなはつたのは」

由兵衛「イヤ餘り仲の善い夫婦を見せ附けられてなア」

榮　公「確りしなはれいな。ヤアあんた何にを書きなはつたのや」

由兵衛「アツ……仕舞つた、迂濶り今の話に聞きとれて、其の通り書いたがな」

榮　公「何にを書きなはつたのやいな。命がけで夫婦になつたのですもの。モシ恁麼事書いたら、やり直しやがな」

由兵衛「コリヤ看板下ろして塗り直さんならんがな、ヱ、面倒臭い翌日の事に仕樣ヲイ榮公恁んなり放つて置け」

榮　公「デモ其れでは怒りまつせ」

由兵衛「何んの聾のお爺が判るものかえ」

榮　公「偉い面白いなア」

由兵衛「皆持つて來いよ」

榮　公「ヘイ――」

ト宜しく道具を持つて二人は下手へ這入る、同時に青年貴家古田市香畫家の拵へにて三脚臺、寫生機を持つて上手よりツカ〳〵と出で來り一寸花道の方を見て思入れ有つて。

古　田「ヲイ嘉兵衛さん〳〵」

ト大聲にて呼ぶ其の一寸以前より女房おかじ茶店の女房の拵へにて使ひ戻りの小包を

持ち下手より出て。

おかじ　「先生々々聾の内の親父に其麽事を云うて聞へますかいな」

古　田　「ヲヽ、おかみさんか今日は」

おかじ　「まあお掛けやす」

古　田　「有難うお使ひですか」

おかじ　「親父が奴聾で、皆な私がせんなりまへんのやがな」

古　田　「大抵ぢや有りませんな、あの一寸聞きたいのですが、北濱の松井のお孃さんはまだ通りませんか」

おかじ　「私は留守だしたさかい判りまへんが、何つも清元のお稽古で此の時間に通りはります、お樂しみだんな」

古　田　「イヤ其麽譯でも有りませんがねへ、今日一時には爰へ來ると約束がして有りますのでね」

おかじ　「其れなら、まだ今ドンを打つた所だすがな、暫らくお待合をなされませ」

古　田　「殊に依るとお父さんと一緒かも知れません故、顏を見ると悟られますから彼處で寫生でもして居ませふ」

おかじ　「貴方お父さんを御存じなのですか」

古　田　「イエ私は知つてますが、先きは御存じ有りません」

おかじ　「一層表向き貰ひに行きなはれいな」

古　田　「デモ恁麽貧乏畫家に誰れが呉れるものですか、夫れが僕の煩悶です」

ト云つゝ思はず看板を見て。

古　田　「ヲヤおかみさん皮肉な看板を上げましたね」

おかじ　「まあ〳〵何にを書きよつたやな、「命がけで夫婦になつたのですもの」まあまあビールの看板に無茶苦茶やがな。何卒先生御緩くりと。ヲイ内の人〳〵」

ト云いつゝ茶店の中へはいる、古田は花道の方を見て思入あつて茶店の上手にて寫生を

する、囃子になり揚幕より娘喜久子、立派なる娘の拵へにて洋傘をさし友仙の袱紗に稽古本を包みたるを持ち出で來る、後より松井卯之助相場師の好みの拵へにて出る。

卯之助　「ヲイ〳〵お喜久〳〵足が早いなア」

喜久子　「デモお父さんと一緒に歩くと、私がせいが高いので、夫婦かと間違はれては、極りが悪いわモツト離れて歩きなはれいな」

卯之助　「お前より此方が厭やぢやがな」

喜久子　「厭なら一緒に來いでもよいのやわ、稽古に行く後から、ペコ尾いて來て、五月蠅やの」

卯之助　「俺れは毎日嘉兵衛の所の辻占を見て高倉へ詣つて、場へ行くのに極つて居るがな」

喜久子　「厭に迷信やこと」

卯之助　「大抵相場師は迷信家が多いわいな」

ト宜しく居直り同時におかじ中より出で來り。

おかじ　「ヲヽこれは〳〵お嬢さん先程より先生が」

トフト卯之助の顏を見て。

おかじ　「ヲヽ親旦那も御一緒に……今日は……」

卯之助　「ハイ毎度御邪魔致します、又一寸辻占を見て御參りをして來うと思うてな」

おかじ　「夫れは〳〵。サア何卒」

卯之助　「ハイ〳〵」

ト五錢辻占箱へ入れて辻占を出す、おかじは古田の居る事を喜久子に目顏で知らす、喜久子はハツト思人れ、古田が出かけるを、喜久子は目で仕方して出るなとの科。

おかじ　「今出ては惡い〳〵」

ト此の時卯之助辻占を見ながら。

卯之助　「何んの惡い事があるものか、おかみさん大上吉ぢや、商ひ利有りぢやがな」

おかじ「夫れはお芽出たう御座ります」

卯之助「一寸お詣りをして來ます」

おかじ「何卒お歸りに……」

卯之助「ハイ〳〵。これ喜久子早ふお稽古に行きなされや」

ト宜しく囃子になり卯之助は下手へ這入る、同時に古田飛んで出て。

古　田「喜久子さん今のがお父さんですね」

喜久子「ヱヽ、爾うなんですわ、貴方が物を言いなはつたら、怎う仕様と思ひました わ」

古　田「夫れは爾うですね、私の様な者が、物を言へば貴下の名譽にかゝわります からねえ」

喜久子「おかみさん、あんな事言いはりますがな」

おかじ「まあ〳〵立つてイチヤつかんと、之れへお掛けやす」

ト床几を前に出す兩人宜しくかける。

古　田「一體喜久さん、貴下は僕を怎う云ふ工合に考へて居るのです」

喜久子「おかみさん今更、あんな事を聞きはりまんがな、私たい怎ない言へまんの やいなア」

おかじ「知りまへんがな、貴下のお心を云いなはれいな」

喜久子「デモ極りが悪い」

ト云いつゝ清元の本を開けて。

喜久子「おかみさん、私いの心は之れ、一寸讀んどくなはれいなア」

おかじ「まあ〳〵歌の文句だすか、『一日逢はねば千日も……』先生よう聞いときな はれや」

古　田「おかみさん僕の心いきはあれです」

おかじ「成程お嬢さんあれ御覽」

喜久子「まあ『命がけで夫婦になつたのですもの』まあ嬉しいおかみさん、今度は此處を讀んでおくれなはれ」

おかじ「堪忍しておくなはれ、恁麼通辯してたら、日が暮れまんがな、一體お孃さん、お父さんは怎う云うてはりますのやいな」

喜久子「モウ年頃やよつて、婿はん持て〳〵と、毎日云うてまんのやがな」

古　田「そんなら立派な婿はんを、持つたら宜しいやらふ」

喜久子「まあ又あんな事を」

おかじ「宜しいがな〳〵、又混線しますがな、一體お父さんは市香先生は、婿にするのを厭やぢやと仰在りますのかいなア」

喜久子「イヱ、夫れはまだ此方の事は知りまへんのやけど、持參金でも有る立派な人ぢや無いと、何ツも口癖の樣に云うてますよつてな」

おかじ「ハアン成程、詰り其の持參金が先生にないと言ふ譯けだんな」

古　田「噫々夫れが僕の煩悶の原因です」

ト泣き聲を出す。

おかじ「泣きなはんないなア、宜しい私たいが引受けて夫婦に仕まよふ」

二　人「眞實ですか〳〵怎うして〳〵」

おかじ「御存じの通りお父さんは、毎日此の辻占で吉凶を占つて、相場をしていやはりますよつて、之れを利用してやつて見ます」

古　田「あの自働辻占器を利用するとは」

喜久子「おかみさん怎う仕ますのやいな〳〵」

おかじ「計略は密なるを以て善しとす、シイ〳〵」

ト二人を押へる、囃子のかゝりになる、おかじは上手の家體へ行けよと目配せする、古田、喜久子は宜しく二重家體へ這入る、おかじも後より共に這入る、同時に上手より實業家の若紳士と其の妻君と何れも好みの拵へにて出來て通り流す塗灰、暖簾口より嘉兵

衛出て。

嘉兵衛　「まあお掛けやす」

實業家　「まあ暫く休んで行かう」

妻　「ヱ、爾う仕ませふ」

ト兩人床几に腰を掛ける。

實業家　「ヲイ茶を一杯呉れ」

ト手眞似でして見せる。

嘉兵衛　「ヘヱ〳〵畏りました」

ト用意をする。

妻　「貴下辻占が有りますわ」

實業家　「二人の相性でも見て見るかな」

妻　「阿呆らしい今更相性見んかて、良いと極ってますがな」

實業家　「これしようもない事云うない、茶店が聞いて居るがな」

ト此の内嘉兵衛は田樂を皿の上にのせて銚子と共に持って來る。

嘉兵衛　「ヘヱお待ちどうさま」

實業家　「ヲイ〳〵違ふよ〳〵酒ぢやない茶や〳〵」

嘉兵衛　「ヘヱ〳〵モウ茄子は吟味して御座ります、名物で御座りますでなア、酒は櫻正宗でな、ヱヘ……」

實業家　「あゝ此のお爺聾やがな」

嘉兵衛　「ヘヱ結構な御天氣で……」

實業家　「あゝ丸で聞へんのやな、まあゝわ、一杯やらう」

妻　「一寸貴方禁酒やおまへんか」

實業家　「ヲヽ違ひない折角ぢやが禁酒ぢやでなア」

嘉兵衛　「夫れは〳〵有り難う御座ります」

實業家「便りのふて、物言うて居られんがな」
妻「貴方彼方の茶店で休みましよいな」
實業家「爾う仕様〳〵お父さん又來るぞ」
嘉兵衛「ヘヱ〳〵有難う御座ります」
實業家「此のお爺奮で一寸足らんなハハ、、、、」
ト官敷捨白詞にて下手へはいる、二重よりおかじ、書き上げた辻占を手に持ち出で來り
おかじ「内の人お客さんはいな」
嘉兵衛「サア〳〵又炭が上つてな」
おかじ「阿呆かいな、このお酒のお客さんはいなア」
嘉兵衛「あゝ爾うか、夫れでは之れ持つて生魂はんの公園で一杯やつて來るわ」
おかじ「違がふ〳〵其のお客さんはいな」
嘉兵衛「ア、其の心意氣が嬉しいわいアハ、、、、」
ト笑ひながら膳を持つて下手へ這入る、おかじは呆れて凝然と見送つて居る、此の時上手の櫺子障子を開けて古田、喜久子の兩人顔を出して。
古田「おかみさん罪の無い親父さんやなあ」
おかじ「眞實に往生します一寸とも店を明けられまへん」
喜久子「今の損害は私が致しますよつて早ふ其の辻占をなあ……」
おかじ「ヘヱ大丈夫、之れを御覽になれば、屹度話が纏ります私が傍から甘い事太鼓を打ちますわいなア」
喜久子
古田「結ぶの神様〳〵」
ト拜む。
おかじ「萬事のみ込んでます」
ト辻占の箱の後より入れる。
おかじ「恁うして置けば此の次に出るに極つて居ます、細工は粒々仕上げをごらう

じろ。但し障子を閉めて隙間からなア……」

ト之れにて兩人再び障子を閉める同時に上手より職人いで來りて辻占箱に五錢入れんとする途端。

おかじ「入れたら不可ん」

職　人「ア、吃驚した、大きな聲やな、入れたら不可んのかへ」

おかじ「機械が潰れて居ます」

職　人「吃驚するがな」

ト誂への囃子になり下手へ這入る、入れ違ひに卯之助下手より出で來る。

卯之助「おかみさん只今」

おかじ「お歸り。之れから後場で御座りますかへ」

卯之助「ハイ爾うぢや、茶一杯下され」

おかじ「ハイ畏りました」

ト茶を入れて出す內、卯之助は看板を見て。

卯之助「イヨー偉い事が書いて有るな『命がけで夫婦になつたのですもの』面白い看板ぢなア」

おかじ「ペンキ屋の奴め、あんな事を書きよつて歸りよつたのだすがな、併し夫婦と云へばお宅のお嬢樣も、モウ年頃で御緣談どきで御座りますな」

卯之助「サア困つてますのぢや、帶に短し襷に長しでな、何處ぞ宜い養子が無いかいなア、色々迷ひますわいな」

おかじ「夫れは爾うで御座りますとも、怎うで御座ります、御商賣の方は、手前方のあの辻占で何時もお占ひなさいまして、宜ふ合ふと仰在つて御座りますが、一ツ御緣談を御覽んなされては、怎うで御座ります」

卯之助「成る程之れは負うた子に敎へられやなア、一ツ占のうて見ませふ」

ト箱の傍へ行きて五錢入れて辻占を出す、此の時障子を細目に開けて古田、喜久子の兩

人覗く、おかじは目で仕方して。

おかじ　「御處元千番と一番の兼合〳〵」

ト之れにて二人は又障子を閉める、卯之助は何んの氣もつかずに、辻占を讀み〳〵元の處へ來り。

卯之助　「全く千番と一番の兼合ぢや。イヨー今日のは判と違ふ肉筆ぢやぜ」

おかじ　「まあ〳〵夫れはお珍らしい、千本に一ッと云ふ書いた辻占、其れは餘ッ程信心家で無いと當りませんそうだすぜ」

卯之助　「あゝ有難い〳〵。高倉稲荷大明神様〳〵。ナニ緣談至急に急ぐべし。但し必ず慾を放れるべし。持參金等を望むべからず。二十八歳の男を良緣とす。商人官吏は不吉なり藝術家を吉とす。良緣は今日只今目の前にころがつて入るものなり。ヒヤー目の前にころがつて居ると、おかみさん何處ぞに轉んで居るかいなア」

おかじ　「眞逆婿さんが、鞠の樣に轉がつてもおますかいな、今目の前に現れますやらう」

卯之助　「あゝ御利益ぢやな、今日は此處は動けんぞ。おかみさん酒と何んぞ拵へてんか」

おかじ　「ハイ〳〵畏りました」

ト暖簾の内へはいる、同時に上手より宗匠田邊幸齋上品なる拵へにて出で來る。

卯之助　「ヤツ轉がつて來たぞ」

幸齋　「ヲ、松村の御隱居今日は」

卯の助　「ヲ、田邊宗匠ですか、あんた内の娘の養子ぢやおますまいな」

幸齋　「何にを云いなさる、突然に」

卯之助　「イヱ實は娘の緣談に苦しんで、今占なふて見ましたら、此の通り今日只今目の前に轉がつてゐると出ましたのでなア……」

幸齋　「ハア……成程。これは肉筆ぢやな」

卯之助「ヘヱー神の御告げで千枚に一枚ぢやかな」

幸齋「夫れは結構〳〵。轉がつてゐると云ふ以上、今此處を通る人に違ひないな」

卯之助「一人〳〵捕かまへて、調べませうか」

幸齋「眞逆其麼事も出來んでなア。ヲホ誰れやらに聞いた話に、或る外國人が奉公口を捜に行て、斷られて歸る時に、門口に落ちてあつた、只つた一本のピンを大事そうに拾ふて襟にさした處を其處の主人が見て、其の細心と注意深さに驚いて此奴見込みが有ると、案の定、大層役に立つて立身出世をしたと云ふ話が有る一ツ爰を通る人間を試めして見たら怎うぢやな」

卯之助「成程爾うだす、併しピンがおまへんがな」

幸齋「ナニ、ピンに限らぬ白紙一枚でもよいぢやないか、只ツタ一枚の白紙を此處へ捨てゝ置いて、我々は知らぬ顔をして夫れを見て居ませふ、通る人が、何の樣な態度で拾ふか興味ある話ぢや御座らぬか」

卯之助「成程遉は宗匠です、一ツやつて見ませふ〳〵」

ト捨白詞にて懐中より白紙を取り出して一枚捨てゝ二人は稍々遠く放れて見て居る。上手より商家の番頭下手より同手代指定の拵へにて出來り兩人舞臺中央にて行合ひ。

番頭「今日は――」

手代「ヲヽ今日は」

番頭「チトお遊びに」

手代「ヘイ大きに」

ト互に紙に目もくれず行き違ふてはいる。

卯之助「モシ宗匠丸で白紙を見まへんがな」

幸齋「夫れは位置が惡いのぢやモツト向うへな」

卯之助「成程〳〵々々」

ト紙の位置を直す再び元の床几に掛ける同時に洋服を着たる紳士下手よりいで來り其

の紙をジロリと見たまゝ上手へはいる。

卯之助「あんな奴は駄目だんな」

幸齋「大抵世の中はあんな奴が多いでな」

卯の助「全くだすな」

ト之れにて和服の紳士指定の拵へにて上手より出來り其の紙を拾ふ。

卯之助「メめた」

幸齋「シツ〳〵」

ト凝然と見て居る紳士は下駄の泥を拭つて其の紙を捨てゝ下手へはいる。

卯之助「ありやなんだす」

幸齋「大落第ぢや新しい一枚の白紙を下駄の泥だけで皆使いよつたがな」

卯之助「目駄ですなア。サア來い」

ト再び白紙を出して置く同時に下手より粋な株屋好みの拵へにて出で來り叮嚀に紙を拾ふて疊む、卯之助は前へ飛んで出て。

卯之助「失禮ながら、貴下お幾ツです」

株屋「喫驚しましたがな、突然に人の年を聞いて、何んです」

卯之助「貴下養子に行きなはれしまへんか」

株屋「偉い面白い人やな、恁麼者貰らひ手がおますかいな」

卯之助「エラ有り〳〵、財産はザット五十万圓娘はまづ〳〵美人の方、年は十九歳如何です」

株屋「偉い結構な話しだすな、場合によれば貰うて下され」

ト此の一寸以前より同人の女房好みの拵へにて出で聞き居り此の時ツカ〳〵と出て傍へ行き。

女房「貴下、其麼處へ養子に行きなはる積りだすか」

株屋「阿呆かいな、あの親父人を嬲りよるよつて、逆に嬲つてやつてゐるのぢや

がな」

女房「あの親父阿呆かいな」

卯之助「へエ――あんたは」

女房「此の人の女房」

卯之助「あッ左様か」

株屋「ヲイおつさん氣を慥に持ちや」

ト言ひ捨てゝ二人は捨白詞にて上手へ這入る。

卯之助「宗匠氣狂ひ扱ひぢやがな」

幸齋「妻君が有るとは知らなんだなア。又來た〳〵」

ト之れにて又白紙を置いて、見て居る同時に紙屑拾ひ上手より出て來り其の紙を引掛けて籠の中へ入れる。

幸齋「コラッ其の紙を怎うするのぢや」

紙屑拾「落ちて有る紙を拾うのが不思議に有るかへ、阿呆めッ」

ト言い捨てゝ下手へはいる、此の内卯之助は紙を持って。

卯之助「宗匠紙屑拾が拾ふのに不思議が御座りませんわい」

トいゝつゝ紙を置く下手より僧侶いで來る其の白紙を叮嚀に拾ふ。

卯之助「〆めた……」

幸齋「あかん〳〵坊さんやがな〳〵」

僧侶「南無阿彌陀佛〳〵」

ト上手へ這入る又卯之助は紙を置く。

卯之助「中々忙しいわい」

ト同時に上手より盲啞學校の生徒いで來り叮嚀に紙を拾ふ。

卯之助「〆た〳〵。あんた一寸待つて下さい」

ト止めて卯之助は色々書ねる、生徒は帽子の記章を見せてはいる。

卯之助「アッ嘘ぢやがな〳〵」

幸齋「松村はん又來たがな〳〵」

ト宜しく紙を置いて待つ紙屑屋出で來りて其の紙を拾ひ叮嚀に疊む。此の内おかじは中暖籠よりでて上手二重家體へ這入る、古田は二重家體より出て中暖籠の中にはいる。

卯之助「〆めた〳〵」

幸齋「慌てなはんな〳〵」

卯之助「大丈夫〳〵。モシあんた……」

紙屑屋「ヘエ何んだす」

卯之助「嫁はんおますか」

紙屑屋「おまへんで」

卯之助「養子に行けますか」

紙屑屋「貰らい手が有れば行きますなア」

卯之助「お年は」

紙屑屋「來年五十……」

卯之助「一寸いきすぎぢや御商賣は」

紙屑屋「紙屑屋」

卯之助「アッ左樣か。又有つたら知らしますわ」

紙屑屋「人を嬲るない」

ト云い捨てゝ上手へはいる、

卯之助「モウやめますわ。逆せて來ましたがな……」

幸齋「今迄やつて止めては、佛作つて魂い入れずですがな」

卯之助「モウ紙がおまへんがな」

幸齋「よろしい此處におます〳〵」

ト自分の紙を取り出して又地上に置き二人は見て居る、同時に古田市香下手へ廻りし心

にて其前を下手より出で通り叮嚀に紙を拾ふて疊む、幸齋は卯之助に傍へ行て聞けと云ふ仕方、卯之助はモウ厭との思入れ、幸齋ツカ〳〵と前に進み來る此の時上手障子を破りておかじ、喜久子の兩人顏半面を出して見て居る。

幸齋　「一寸伺ひますが、貴下奥様おますかいなア」

古田　「イエ有りません」

幸齋　「〆めた〳〵。アノ紙屑屋と違ひますな」

古田　「違ひます、僕は畫家です」

幸齋　「お年は」

古田　「二十八歳です」

卯之助　「待つた」

トツカ〳〵と幸齋を突きのけて。

卯之助　「二十八で畫家、藝術家ぢやな。ヲヽよふ轉がつとくなはつた、若し私しは此の樣な者です」

ト名刺を出して。

卯之助　「貴下養子に來て貰へまへんか」

ト宜しく思入れ途端、上手より覗いて居るおかじ、喜久子の兩人は力ら餘つて障子を前に突き仆す。

おかじ　「〆めた……」

ト云ふが木頭。

卯之助　「ヲヽ。娘か此の人怎うぢや……」

おかじ　「大氣に入り……」

幸齋　「萬歳〻〻」

ト此の模樣宜しく喜久子は恥しき科幸齋、おかじは兩手を擧げて喜ぶ古田は極り惡き科卯之助は共に大喜びの表情にて賬かなる囃子にて拍子木。

辻占

四〇

滿來

女蛇の目

【一場】

登場人物

見染し男若旦那　令嬢
見染められし女　五郎
世話焼きの人番頭　大磯
　　蝶六

【俳優】

京都鴨川附近先斗町の場

舞臺背景向ふ竹村屋橋を經て先斗町を見たる雪の書割、上手斜に汁粉屋曙の表門、五寸高の上に雪の積りし庇の下に藝者連名の茶暖簾を掛け、杭木の板に白文字の假名書にて曙と記し三巾の鼠色の暖簾をかけ曙と染め抜く、上手大なる竹の鉢植の松雪持、下手舟板の欄子に窓を作り障子を閉める、意氣な竹造りの掛け行燈に『しるこ』と記し掛け有る、舞臺一面雪布を敷く。兩花道共同じく雪布を敷き、下手に新式のポスト烈しき雪音の囃子にて幕開く。

ト薄き雪音に千鳥の鳴聲を聞かし、誂への囃子唄になりて令嬢立派なる拵へにて流行のショールに爪皮の高下駄、紅葉傘をさし、靜々といで來る、少し後より紳商の若息子の拵へにて若紳士、澁蛇の目傘をさして、令嬢の姿に見惚れながら後を尾けて出る、令嬢は氣味惡き科にて花道七三にて止り、ジット若紳士を見る、若紳士は耻しき科にて二足三足後へ戻る、令嬢はやりすごす心にて下駄の鼻緒を直す、若紳士はジット夫れに見惚れて居る。

令嬢「貴方御邪魔をいたします」
紳士「イヱ何う致しまして」
令嬢「何卒お先きへいらしつて下さいまし」
紳士「イヱお緩りと」
令嬢「貴方私に何か御用なのですか」

紳士「イヱ……別に」

令嬢「夫れでも電車で私の顔ばかり御覽なさいまして、五條の停留場で同じ様に下車なさいまして後になつたり先きになつたり、モウ三條も其處ですが何處へ御出になるのですの」

紳士「ハイアノ自分も三條迄……」

令嬢「夫れでは御先きへいらしつて下さいまし、女の足の後からでは道もはかどらず致しますから、夫れに何んだか私も氣兼で御座いますから、御先へ御出で下さいまし」

紳士「ハイ夫れではお先きへ」

ト再び唄になり、紳士は令嬢の先きへ行く、令嬢思入有つて其儘揚幕へ引返す、紳士はオヤと云ふ科にて同じく後を追ふて揚幕へ入る、雪音に千鳥の唄聲を聞かし、令嬢は假花道より出て來る、紳士も同じく其の後より來る、令嬢は振り返りて。

令嬢「ヲヤ又貴方此方へ入らつしやつたのですか」

紳士「エツ……アノ一寸用事の都合で」

令嬢「氣味の惡い御方ですねえ」

ト宜しく氣味合の唄になり、兩人宜しく本舞臺へ居直る、令嬢下手へ來る、紳士同じく追うて行く。

令嬢「貴方三條へいらつしやるのぢや御座いませんか」

紳士「ハイ左樣で」

令嬢「三條は彼方ですよ」

ト上手の方角を指す。

紳士「エツ……一寸用事の都合でへ、、」

令嬢「厭な方ねえ」

ト唄になり、思入有つて舞臺を一廻り歩く末、足早に上手曙の暖簾を開けて令嬢は内に

這入る、中にて御出でやすと大聲にて云ふ、紳士はハットして同じく曙の前へ來りて、極り惡き科にて暖簾と障子の隙より穴を開けてジット中を覗き居る、ト中にて男の聲にて誰れぢやと大きく云ふ、紳士喫驚して立ち退く、と同時に世話燒きの番頭好みの拵へにて番傘を持つて曙の中より出で來り、下手へ行きかける、紳士は遣り過し置きて、再び中を覗く、番頭は夫れを見て、

番　頭「誰れや汁粉屋の中を覗くのは、尋ねる事が有れば中へ這入りなされ、今も叱かつたのぢやないか、中の客が厭やがるがな、喰物屋の中を覗くとは貧しい人やなア」

ト云ふ聲を聞き思入有つて、

紳　士「政公やないか」

番　頭「オ、若旦那今日は、貴方だすか、御大家の若旦那が變な眞似をしなさんないなア、今も御客の噂では下駄泥棒かも知れんと云ふてましたで」

紳　士「へ、、、、夫れはさう思はれても仕方がないなハ、、、」

番　頭「笑ひ事やおまへんで、名譽に掛はりますぜ、何處へ行きなはつたのや」

紳　士「政公此處は何處や」

番　頭「厭やだつせ若旦那、此處は四條川端上つた處だすがな」

紳　士「何時の間に怎んな處へ來たのやいな」

番　頭「若し、氣を慥に持ちなはれや、現で歩いてなはるのかいな」

紳　士「實に面目無い政公、人に云うてなや、今朝大阪へ用が有つて日歸りの歸り道、車も寒いと思ふて七條から電車に乘ると、隣の方からヴアイオレットの香水の香がプント鼻へ來た、マア〳〵床しい匂ぢやと其の方を見ると、なア……政公……」

ト妙な聲を出す。

番　頭「若旦那、往來で妙な聲を出しなはんな」

紳　士「夫れが年の頃は二十前後、濡烏の様なハイカラに水も滴るヒスイの簪、此の雪が鼠色に見える程の色の白さ、水際立つた襟足に僕の理想の顔の輪郭、眼鼻立のハツキリした雪中の寒紅梅か、流行に後れぬ服装に寒いと見えてショールに首を縮めて、慎ましげに乗つて居る美しさ、ア、偖も〳〵美しい何處の嬢様や知らんと、色々空想に耽つているとジロ〳〵僕の顔を見て下さる嬉しさ有難さ」

番　頭「若旦那シツカリしなはれや、祇園町や先斗町で散々遊んだ貴方の云ふ事だすか、人が笑ひますぜ、阿呆らしうもない」

紳　士「マアさう云はずと聞けよ」

番　頭「聞きますがな、夫れから何うしましたのぢやいなア」

ト少し荒く尋ねる。

紳　士「さうポン〳〵云ひないな、スルト其の娘さんが五條で御下車遊ばされたのぢや、オヤと思ふて僕も一緒に降りたのさ」

番　頭「お宅は二條やおまへんかいなア」

紳　士「其場合そんな事を考へて居るかえ、何處の嬢様かお宅を突き留めて置いて人を以て結婚でも申込めるなら嬉しいと、吹雪に吹かれて附いて歩いたのぢや」

番　頭「まるで高等出歯亀ぢやがな、そうしてお宅が判りましたのかいな」

紳　士「夫れがなア……政公」

ト憐れに云ひかける。

番　頭「憐な聲を出しなはんないなア」

紳　士「五條の川端から此處まで、後になり先きになり尾いて歩いて居たものぢやでなア、先もしまひに氣味が悪くなつたと見えて、先きも其處で厭な人ねえと睨まれた情けなさ……」

番　頭「當り前ぢやがな、ヨウ交番所へ突出されずに濟みましたなア、先のお嬢さんが温順しいよつて無事に濟みましたのやで」

紳　士「多分僕を厭な奴だと思ふてゐらつしやるだらうねえ」
番　頭「思ふて居まへいでかいなア」
紳　士「ア、俺は患うかも知れんよ、政公頼むよ」
番　頭「氣の弱い事を云ひなはんな、何んでぶつつけに失禮ながら貴女の御宅はとお聞きなはらんのやいな」
紳　士「耻しいそんな事が聞けるかえ、ア、頭が痛い、政公病院へ連て行つてくれ」
ト刈な聲を出して頭を抑へる。
番　頭「厭な事を云いなはんな、氣を大きく儲に持ちなはれ、夫れ共嬢さんはモウ見失ひなはれたのだすか」
紳　士「イヤ今此の曙へおはいりになつたの、後から這入らうと思つたけれど流石に極が悪いので表でモジ〳〵して居る内に、アノ障子に穴を開けて叱られたのぢや」
番　頭「する事が間が抜けてますがな、今張つたばかりだすがな」
紳　士「恰度お前と入れ違ひ位だよ」
番　頭「ア、あのハイカラに結ふて居た一寸綺麗な玄妻だすか」
紳　士「コラツ失敬な事を云ふな、玄妻なんて何ぜ嬢様とか姫様とか云はんのだ」
番　頭「阿呆らしい、恩も義理もない人間にお姫様なんて云へますかいな」
紳　士「デモ僕の妻となれば奥様と云はねばならんだらう」
番　頭「さうなれば云いますわいなア」
紳　士「何れは屹度なる人だ、今から云うても決して差支へない。奥様と申上げろ」
番　頭「未だ海の者とも山の者とも判りやしまへんがな」
紳　士「何アに僕の名譽財産を犠牲にしても、屹度結婚するに決まつて居るのぢや」
番　頭「名譽迄犠牲にして貰ふ程の娘やおまへんぜ、あの位ひの女は祇園町には掃く程おますがなア」

紳　士「掃く程有つても散る程有つても僕の眼中には彼の方より外にないのだ、失戀の結果入院でもして死んだら、貴様間接の殺人犯だぞ」

番　頭「大きな事を云ひなはんないナ、決して邪魔も妨害も致しませんが、一寸考へても判りますがな、成程身なりは立派でも女中一人供に連れて居るやなし、平氣で一人で汁粉屋へ飛込む女、あんまり貴族の嬢さんでもおまへんで」

紳　士「尙更結構ぢやないか、貴族の令嬢で有れば結婚を申込むのも氣が張るが、ナノ房は下から貰へとの假令の通りだ、恁んな良緣をはづしては又とない、詰り戀愛の神様に愛されたお蔭ぢや、オイ政公、お禮はするからお前一寸中へ這入つてあの嬢様に禮儀を正してお所を聞いて來てくれ」

番　頭「厭だんがな、貴方でさへ極りが悪いのに至つて口下手な私が突然にそんな事、聞いたらそれこそ出齒龜と間違はれますがな」

紳　士「ア、左様か。夫れでは仕方がない、政公何時かお前に貸した五十圓は先月の三十日が期限になつて居るなア」

番　頭「ヘエ左様で……何共申譯が御座りません」

紳　士「アノ證文の文句では御返濟致さぬ節は直に差押へとなつて居るな、マア永い出入のお前故家へ執達吏なんて遣るのは濟まんけれど、堪忍してや」

番　頭「若旦那、眞綿で首をメめなはんないな」

紳　士「僕がやるのぢやない、法律がやるのぢやで、惡からずねえ」

番　頭「宜しいがな〳〵、中へ這入つてお所を聞いて來ますがな」

紳　士「濟まんなア、アノ證文は燒き捨てるよ」

番　頭「ヘエ五十圓の仕事なら聞いて參りますがな〳〵」

紳　士「ア、感謝する、終生忘れられない恩人である……」

ト眞面目に頭を下げる途端、中にて再び大きな聲にてヨーおいでやす、と聞かす兩人顏見合して紳士はハットしたる思入れ有つてポストの後へ隱れる、再び小意氣な唄にな

つて令嬢内より出て來る、番頭は極り悪げに思入有つて小腰をかゞめ。

番頭「ヱヘ……」

ト笑ひながら頭を下げて前へ寄る。

令嬢「アツ驚いた、貴方何んですの」

番頭「今日は結構な御天氣様で」

令嬢「オヽ……恁んなに雪が降つていますよ」

番頭「アツ成程雪どけで、結構の御天氣でへヽヽヽ」

令嬢「何か御用なの」

番頭「ヘイ失禮ながら貴女お處は……」

令嬢「貴方は何方の御方ですの……」

番頭「ヘヱ——私は門前の政と申しますもので、貴女の御所は……」

令嬢「私の所を御聞きになつて、何か御用が有るのですか」

番頭「ヘイあの一寸……」

令嬢「御用を仰しやつて下さいな、其の御用の筋を」

番頭「ヘツ其の用件は……」

令嬢「御用は」

番頭「ヘヱ——あの若旦那一寸來とくなはれ」

ト思はず叫ぶ、紳士はボストの蔭よりヌート顏を出す、令嬢と顏見合し。

令嬢「オヤ厭な人ねえ」

ト宜しく引張りになり、跳への囃子にて令嬢は花道へはいる、紳士、番頭の兩人互に顏見合して暫く呆然。

紳士「馬鹿ツ」

番頭「夫れでも、あゝなつたら極りが悪うて聞けますかいな」

紳士「何を愚圖〳〵云うて居るのぢや、向うへ入らつしやるぢやないか、お姿を

見失ふたら、どうするのぢや、早く後をつけないかえ」

ト手荒く政公を突く。

番頭「えらい災難ぢやがな」

ト兩人は早足にて令孃の跡を追ふて同じく揚幕へ這入る、其後暫らく小意氣な唄になり令孃は後へ氣を配りながら假花道よりいで來る、良き處にて後を向き。

令孃「オヤ〳〵又二人で追ふて來たわ、厭だね何んだかこわくなつて來たわ。車か自動車がないかしらん」

ト舞臺の自動電話室を見て思入有つて本舞臺へ來り、自動電話室へ隱れる、揚幕より紳士番頭の兩人花道より來る、番頭は下駄の鼻緒を切り、下駄を傘の先にして夫れを擔いで先きに出る、紳士は焦れて番頭に早く行け〳〵と後より突きながら、假花道よりいで來り七三にて。

紳士「オイ〳〵政公、自動電話室へお這入りになつたらしいでな」

番頭「ナア若旦那、事に依つたら先もお氣がついて人相の惡い出齒龜が二人追ふて來たから、迎ひの自動車を呼んで、御宅へ歸ると云ふ電話を掛けて居るのかも知れませんでなア」

紳士「そんな事になつたら大變だ、お前も直ぐに繩手の安藤へ電話を掛けて、直ぐ自動車を廻せと云へ」

番頭「まるで活動の追駈け合ひぢやがな」

紳士「早くしろ〳〵」

ト云ひつゝ兩人も本舞臺へ來る。

番頭「ナア若旦那、考へて見ますと之れは今日一日仕事だすぜ、あのお孃樣が一日自動車で走られましたら我々も一日自動車で走らんなりまへんな」

紳士「差支へないぢやないか、モウ恁ふなれば金も時間も問題ぢやないよ」

番頭「サアお金には構ひはおますまいが、餘りする事が馬鹿〳〵しいので、政公

もついて居ながらと、後で御店のお方に笑はれますがな、矢張り思ひ切つて此處でお處を聞きませう」

紳　士「だつて先きの樣な破目になれば尙更先樣の御感情を害するのみで、お所なんぞ仰りやしないよ」

番　頭「サア其處が工夫で御座りますがな、今にも自動電話からお出ましになつたら、貴方が平氣な顏をして彼のお嬢樣の前をズート通りなされ、さうして態と雪に辷つて倒れなはれ、さうして骨の筋でも違つた樣に痛さうな顏をしてアイタアイタと大業に云うて御覽、どんな人でも見捨てゝ行く筈はなし、御怪我でもなさいましたかと來たらモウしめた物、色々と御親切に御介抱下さいましてと御禮が云へませう」

紳　士「成程〳〵あのお嬢樣に御介抱が願はれるのか、有難いな〳〵」

ト喜び勇む。

番　頭「マア〳〵落附きなはれ、何れ御禮に參りますお所はと聞いて御覽、何うしても先樣が云はねばならぬやうになりますがな」

紳　士「實に名案だ、政公直ぐに證文を返すよ」

番　頭「證文の事は何うでも宜しいが、甘い事倒れなはれや」

紳　士「大丈夫だよ、詰り恁うだろ」

ト其處へ仆れる。

番　頭「何にをしなはるのや、着物が泥だらけやがなア」

ト之にて唄になり、兩人は令嬢の出て來る樣子に一寸下手へ來りて木隱する、同時に令嬢電話室より出て、後先きに氣を配りながら下手の方へ來る、良き所へ紳士いで來りて互に顏見合して宜しく氣味合ひ有つてすれ違ひ紳士は態と仆れる。

紳　士「ア――痛い〳〵」

ト令嬢は夫れをジット見て介抱もせず。

令嬢「粗忽かしいお方ねえ」

ト云ひ捨てゝ下手へ來る、番頭は其の前へ立つて。

番頭「ヱヘヘヘヘ」

ト笑ふ令嬢不氣味らしく再び上手へ來り、紳士の前に立つて居る、紳士はジツト顏を見て、

紳士「ヱヘヘヘヘ」

ト笑ふ、令嬢再び下手へ來り、番頭と附け廻りになつて花道へ行く時、紳士は思切たる科にて立上り、ツカ〳〵と舞臺際へ行き、

紳士「貴女・一寸お待ち下さい」

ト大きく云ふ、令嬢は屹度なつて思入宜しく。

令嬢「五月蠅い奴等だねえ、そんなに欲しけりや返してやるよ」

ト懷中より金側男持の時計を出してポント舞臺へ投げる、番頭は驚きて、

番頭『やツ此の時計は……』

ト拾つて紳士に見せる、紳士はハツト驚き、自分の帶の間より時計の鎖丈けを引出す。

紳士「ヲヤ……」

ト番頭と顏見合して呆れるを木頭、令嬢はニンヤリ笑ひながら。

令嬢「氣を附けやがれ、唐變木め……」

ト誂への囃子になり、令嬢態度一變毒婦の巾着切の科にてジツト揚幕へ這入る、番頭紳士の兩人は呆れてジツト見送る、此の模樣に雪音を冠せて烈しく雪を降らす體にて官敷

滿來

忠臣藏 裏の裏

【三場】

(1) 七段目一力樓裏口の場
(2) 同　一力樓の座敷の場
(3) 五段目の場

登場人名

早野勘平　五郎
斧定九郎　五郎
大星力彌　蝶の丸
力彌の母お石　龜鶴
下女おりん　林蝶
高窓太夫　胡蝶
仲居おらん　小時
同　おつる　一福
同　おもと　五良丸
駕屋松藏　時丸
同　吉助　五六
太皷持五八　笑將
同　三八　蝶八
同　一八　蝶七
同　九八　一郎
一文字屋才兵衛　四郎
庄屋庄兵衛　蝶六
大星由良之助　太郎
上瑠璃　竹本連中
狐

【俳優】

五童

(1) 七段目一力楼裏口の場

本舞臺一面黒板塀正面出入口有り、用水桶等位置能く並べ總て祇園一力楼の裏口の體賑やかな散財の囃子にて幕開く。

ト正面入口より高窓太夫仲居おつるおもと提灯を持っていで來り、

高　窓　「サア〳〵皆なさん四條河原まで附合ふて下さんせ」

お　元　「屹度來ると云ふ辻占に、待つて居れば良い事に、太夫衆の身を以て、下河原迄おむかいとは、きつい御心底」

お　鶴　「サア夫れが世に云ふ戀の道、粋が身を喰ふ例令の通り、惚れた弱身で御座んすわいな」

高　窓　「アレ煽動さんすな、厭やぢやわいなア」

お　元　「サア行きやさんせいなア」

ト華な囃子になり、向ふへ行かんとする、と花道より斧定九郎前髪若衆の好みの拵へにて駕に乗り花道にて擦違ふ。

お　鶴　「駕の衆……」

お　元　「中のお客は……」

吉　助　「ヘイ斧の若旦那定九郎様で御座ります」

高　窓　「其んなら中は定さんかへ」

定九郎　「ヲ、高窓か」

高　窓　「待つて居たぞへ、餘んまりお前がおそい故」

お　鶴　「太夫さんの御上意で」

お　元　「大門口までお迎ひに」

定九郎　「なぞと甘く口を合したなア、一杯俺を、かつごうと」

高　窓　「あれ又あんな憎らしい」

ト定九郎と思ひ駕屋の吉藏をつめる。

吉助「ア……痛い……」

松藏「ヲイ相棒怎うしたい」

吉助「惚けの間に狭まれて、おまけにグツトつめられたのぢやい」

定九郎「夫りや氣の毒な、ソレ酒手ぢや」

ト金子を與へる。

吉助「ヘイ有り難ふ御座ります」

松藏「旦那私しは……」

定九郎「つめられずに遣つては肩身怨みじや」

松藏「其れじや旦那私もつめつてどつさり酒手を」

定九郎「ヨシ……」

ト松藏をつめる。

松藏「アイ……痛タ……」

高窓「あれ手ごせずに早ふ座敷へ」

ト定九郎の手を取る。

定九郎「駕屋痛たかつたかへ」

ト高窓の手をグツト振る。

高窓「アツ……痛タ……」

定九郎「逢ひたけりやこそ、駕で來たのぢや」

ト艶かしく云ふ、賬かな囃子太鼓地になり兩人は正面へはいる。

吉助「サア駕を怎うして置いて一杯呑みに行こうかへ」

松藏「夫れがいゝ〳〵」

ト駕屋兩人は下手へ這入る、と唄になり妻お石下女おりん好みの拵へにて兩人いで來る

其の後よりおりんの父庄兵衛附いて來る。

庄兵衛「何んと奥様、入相の鐘が廓の夜明けかな、とはほんに祇園町は又格別で御座りまするなア」

お　石「ほんに其誰の云やる通り、怎麽處へ來てお出で遊ばしたら、旦那様もお歸りにならぬのも最もぢやわいなア」

おりん「あれ、まあ奥様のお氣の良い事、チト悋氣遊ばして、三日に一度は連れてお歸りなされませ」

庄兵衛「ヱヽ、つべこべと八ケ釜敷いわい、大星由良の助様の奥様ともあらふお方が、悋氣をなされてたまるものか、默つていよ」

おりん「なんぢやい父さん、お前でも山科で庄屋を勤める身で有りながら、何ツも母さんが悋氣をして叱られて、何ツも私しが誤つて上げるのぢやないかいなア」

お　石「これ、りんとした事が……何を道中で……人が聞いたら笑ふわいなア」

庄兵衛「チト謹みおらうぞ」

おりん「ハイ〳〵」

ト宜しく本舞臺へ居直る。

お　石「サア一力の裏までは來た事は來たなれど、怎うも這入り憎ひ、色茶屋では女御は餘り好まぬゆへ」

おりん「左様なれば奥様、私の父を這入らしては怎うで御座ります、根が少し阿呆で御座りまするが、言ふて遣れば判らぬ事も御座りますまい」

庄兵衛「ヤイ親を捕へて小僧の様に吐かすない……然し奥様私で足ります御用なれば」

お　石「フムそんなら其誰大義ながら」

庄兵衛「ヘイ〳〵畏りました」

お　石「したが申上げる事は一言なれど、人目の多い此の色茶屋、油斷のならぬ今の時節、旦那様には夫れを知つての色狂ひ、では有るまいかと思ふゆへ、私も餘

んまり判らぬなれど、今日お前がお目に掛るとすれば、矢張り人の手前として、一と言や二タ言の御意見は、人の手前でせねばならぬ、其の邊の處を呑み込んでなア」

庄兵衛「ヘイそんなら旦那様に人前だけの御意見をするので御座りまするか」

おりん「何うで意見をした處で、豆腐に鎹糠に釘、尚更お前の意見ぢやもの」

庄兵衛「エ、八ケ釜敷いわい……爾うして奥様其の御意見の仕様は……」

お石「サア……先づ何んと言ふたら宜からうやら……ヲ、夫れ々々、私は御存じの山科村の、庄屋の庄兵衛で御座りまする、一ト言申上げたさに參りました、チトお酒をお窘みなされませ、御身の爲で御座りまする、爾うして鎌倉への御出立は、何ッ頃で御座りまするのぢやと云へばよい」

おりん「イエ〳〵奥様、其麼ことではこたへませぬ、父さん私が教へて上げる、旦那さまの前へ行けば先づ手を恁うついて（自分の膝へ手をついて見せ）ヘイ〳〵これはお御殿様で御座りましたかヘイ私は先殿様から御恩になりました山科村の庄屋の庄兵衛で御座ります、又口輕庄兵衛とも申しました先殿様御切腹遊ばした御無念は、寝ても覺ても轉んでも忘れず、百姓ながら御恩は變らぬ御主の仇、己れ師直と思へ共、要愼きびしく寄り附けず、責めて鍬腹切つてと存じましたが、夫れも痛さに桑原々々、様子を聞けば何れも様、連判でも有りはしまいか、若しや仇打の御心なら、御供へお連れ下さりませ、とサ爰迄言へば旦那様は、屹度何んとか云ふて御立腹ぢや、其處をモット附込んで」

庄兵衛「中々長い文句ぢや、忘れぬ様に書ひておくれ」

おりん「サア〳〵假令何んと仰在ても……」

ト矢立を出して書き始める、捨白詞よろしく有つて。

ト庄兵衛の書いて居るのを一寸見て。

おりん「宜いかへ、書けたかへ土百姓の私でも、千五百石の貴下様でもつなぎまし

たる命は一ツ、御恩に高下は御座りませぬ、トサア押すに押されぬ御家の筋目、
假令お草履を摑んでなりとも御供致します、御本心は〻〻〻、ト之れ迄云ふても
判らねば、一層と云ふのぢや」

庄兵衛「一層……怎うするのぢやへ」

おりん「刀に手を掛けるのぢや」

庄兵衛「へヱ……」
ト慄へて怖く。

おりん「其處まで行かねば人は本統にせぬわいな」

庄兵衛「ヨシ〳〵怎ふ書いて置けば何んとか甘く遣つて見よう」

お　石「餘んまりな阿呆な事を云うてはならぬぞへ、爾うして第一大事の御用と言ふのは、今夜初夜の鐘の音を合圖に、伜力彌が大事の密書を御渡しに參るゆへ、踊りの間の椽先に待つて居て遣つて下されと、之れを忘れぬ樣に言うて下さい」

庄兵衛「ヘイ〳〵畏りました」

お　石「夫れではおりんや先きへ歸らう」

おりん「はい〳〵之れ父さん、しつかりやらんせや」

庄兵衛「ヨシ〳〵大丈夫ぢや、然し山科まで御ひろいでは」
ト傍の駕を見て。

庄兵衛「ヲホ幸ひ、之れ此處に駕が有る、此の駕に奥樣を」

おりん「之れはあつらへ〳〵、サア奥樣お召し遊ばせ……」

お　石「駕の衆はへ」

おりん「ハイ〳〵呼びます〳〵サア〳〵お召し遊ばせ」

お　石「夫れでは庄兵衛殿、賴んだぞへ」
ト捨白詞にて駕に乘る。

おりん「ヲイ〳〵駕の衆〳〵お客ぢや〳〵」

ト呼ぶ、駕屋二人下手より出で來り。

二人「ヘイ〳〵有り難う御座ります」

おりん「山科迄大急ぎ……父さん歸るぞへ」

庄兵衛「其れでは之れで別れる事に仕様……」

ト庄兵衛は中央入口にはいる。

おりん「サア〳〵駕屋さん、やつた〳〵」

松藏「中の御客様は」

おりん「誰れでも構わぬ」

吉助「デモ怎うやら重い」

ト駕の垂を上げて、

松藏「成程重ひ……」

吉助「お石様……」

おりん「ア、之れ、シッ……

ト押へる、賑かな唄になりお面白味にて駕を擔ぎおりん共々花道へはいる、後へ直ぐ大星力彌七段目の拵へにて出で來り文箱を持ち正面の入口に向ひ、

力彌「頼む〳〵」

ト之れにて仲居おらん出で來り、

おらん「誰ぢやいな〳〵」

力彌「ヲ、仲居頭のおらん殿、爾うして父上は」

おらん「今踊の間に居やしやんす、力彌さんヨウマア顏を見せて下さんしたなア」

力彌「ハテ今日は其處どころではない、父上に火急の用事、初夜の鐘を合圖に、踊の間まで行かねばならぬ」

おらん「初夜と云へば、まだ間の有る事、夫れまで私の部屋へ參りませう」

力彌「イエ〳〵女と同席平に〳〵」

おらん「あれまあ意地の悪い力彌さん、お前をフト思ひ初めてから、肥つた私も痩せおとろへ少しは不愍と思ふて下さんせいなア」

力彌「之れは又おらん殿、人が見たら笑ふぞへ、泣顔ふきやれ」

おらん「アノ情けない」

ト此の時奥にて『おらん殿〳〵』と呼ぶ、

おらん「ヱヽまあ折の悪い……ヤレ〳〵力彌さん、私の心の思の丈けを此の狀に書いて有る故、緩り讀んで宜いお返事を」

ト又内に『おらん〳〵』と呼ぶ、

おらん「あれ〳〵又呼んで居る、果て忙しない、今行くわいなア」

ト未練殘して元の處へはいる、

力彌「偖て〳〵々々色狂ひ同様ぢや、戀なればこそあの年で、まだ前髪の某へ、偖ても可笑しき此の色文、何様色の世の中ぢや」

ト手紙を捨て一寸思案をなし、再び手紙を拾ひて袂へ入れるを木頭、跳への囃子になり道具一轉する。

(2) 同　一力樓座敷の場

本舞臺二重の通り、正面華な茶屋暖簾、上手に二階花道、七三に芝折戸、總て例の忠臣藏七段目の場面、此の樣宜しく踊地の太皷にて道具納る。

ト大星由良之助始め太皷持五八、一八、三八、九八の四人仲居皆々居並び酒を呑み居る體。

大星「サア〳〵皆呑め〳〵、今日は酒を澤山呑んだ者が小判のものぢや」

一同「ヘイ〳〵有難ふ御座ります」

大星「肴と云へば之れでは呑めぬ、ヲヽ、夫れ〳〵鯉絞めて鍋燒しよふ、用意せい〳〵」

一同「ヘイ〳〵畏りました

ト此の時下手より以前の庄兵衛いで來り、

庄兵衛「アイヤ暫らく〳〵、暫らくお待ち下さりませ……」

大星「ヲヽ、其方ちや庄屋の庄兵衛か、ナゼ止めた」

庄兵衛「ヘイ今日は先殿様判官様の御命日、鷄とはあんまりな」

大星「何にが餘りぢや、御命日ゆへ鷄を喰へぬと云ふお達しが有るぢやたし、捨て置け〳〵」

庄兵衛「サア之れからぢや」

大星『何にが之れからぢや」

庄兵衛「イヤ此方の事で御座ります」

ト懐中より以前の紙を取出し讀み始る。

庄兵衛「申御家老様・私しは御存じの通り先殿様の御恩を受けました口の悪い口輕庄兵衛で御座りまする・先殿様御切腹遊ばしてより寢ても覺ても轉んでも無念を忘れられず、己のれ師直と思へ共、要愼嚴しく寄り附けず、責めて鍬腹切らうと思ふけれ共、夫れも痛さに桑原々々、様子を聞けば何れも様、若しや仇打の連判でも有りますまいか、萬一其麼事なればお供にお連れ下されませ……と此處まで言へば貴方は何んとか仰在る」

大星「何んの事ぢや、仇打ぢや・怖やの々々々、一時は其麼事も思うたが、考へて見れば首尾よふ打てば後は切腹、青海苔貰ふた返禮に、代々神樂を打つ様なもの、所で止めた、千五百の私でさい其の通り、殊に百姓のお前方が仇打ちとは物好きぢや、連判抔は氣もない事〳〵」

庄兵衛「來た〳〵」

大星「何んの事ぢや」

庄兵衛「サア土百姓の私でも、千五百石の貴下様でも、つなぎましたる命は一つ・

御恩に高下は御座りませぬ、トサア押すに押されぬ御家の筋目、假令草履を攝んでと、又お荷物を擔いでなり共、御供致します申し〳〵、ヤツ御家老様にはモウぎよしなつたそうぢや」

大　星「まだ寢て居りやせんぞ」

庄兵衛「其處で寢て貰わねば都合が惡ひ」

五　八「妙な意見ぢやなア」

大　星「寢て居ねば惡くば寢るとしよふ」

ト大星は横に寢る。

庄兵衛「ソレ〳〵爾うこねば本物ぢやないわい……ア、申し〳〵」

大　星「何んぢや」

庄兵衛「ソウ返事しては怎うもならんがな」

大　星「ヨシ〳〵今のは寢言ぞや」

庄兵衛「御家老様には死人も同様、御氣がつかねば一層……」

ト意氣込む。

五　八「ヲイ〳〵何にをして居るのぢや、先前から聞いて居れば譯の判らぬ事を吐して、早く歸れ〳〵」

一　八「お酒の場席の邪魔になるわへ」

庄兵衛「サア酒でも無理に上がらずは、ヨモ御命は續きますまい、覺めての上の御分別」

三　八「八ケ釜敷わい」

庄兵衛「一平に〳〵」

九　八「大分此奴阿呆ぢやなア……」

皆　々「追ひ出せ〳〵」

ト皆々立かゝる、此の時奥より一文字屋才兵衛いで來り、

才兵衛「これ〳〵お前方何にをするのぢや、此の方も矢張り旦那の御家來ぢや、粗忽が有つては濟まぬぢやないか」

皆々「デモあんまりな」

ト意氣込むを才兵衛は止めて、

才兵衛「果て何にをするのぢやい……モシ御百姓、堪忍して遣つて下されや、行儀の知らぬ者斗りぢや」

庄兵衛「ヲホ今日の無禮は許して遣る、以後謹め」

皆々「アノほげたを」

ト意氣込を才兵衛は止めて、

才兵衛「果て偖て行けと申すに」

ト切張り言ふ、上るりになる、

『無理に押へてめい〳〵を、伴のふ一間は善惡の、明火を照らす障子の内、影を隱して入りにける』

ト皆々奥へはいる。

庄兵衛「ア、大水の引ひた後の様ぢや……ア、中々〳〵意見と云ふものは偉ひ者ぢや……申し〳〵旦那様……」

大星「お前今日何にを云いに來たのぢや」

庄兵衛「ヘイ一寸附け燒齒の御意見に」

大星「爾うして何んぞ外に用が有るのか」

庄兵衛「ハイ今晩初夜を合圖に若旦那力彌様が顔世様よりの密事の御狀を此處へ持つて見へますゆへ、何處へも行かずに此處で待つていて下されの事・奥様よりも御傳言で」

大星「よし〳〵」

ト此の以前より上手二階にて定九郎此の樣子を聞いて居り、フト此の時由良之助と顔見

合せ、ハット驚き由良之助は庄兵衛に行けと目顔で知らす、庄兵衛心得て元の處へ這入る、由良之助は二階へ向ひ、

大　星「ヲ、定九郎殿か」

定九郎「大星殿か」

大　星「そもじは其處に何にしてぞ」

定九郎「身は其處元に盛り潰され・餘り勞らさの醉ひ醒し風に吹かれて居るので御座る」

大　星「夫りやまあ宜ふ吹かれて居やるのふ、ダガ定殿チト話したい事が有る、家根越しでは話もならぬ、大義ながら一寸降りてたもらぬか」

定九郎「話たいとは何か賴みでも御座るか」

大　星「マア其麼ものぢや」

定九郎「其れでは彼方より廻つて參らう」

大　星「イヤ〳〵臺所を廻れば又仲居共が捕へて酒にしよふ、幸ひ爰に九ツ梯子、之れをふまへて下りてたまふ」

ト梯子を下へおりてかける。

定九郎「何んだか船に乘つた樣で」

ト言いながら二階より飛び下りる。

大　星「ヲ、大變な勢ひじやなア」

定九郎「人の氣が短くなつて居るからぢや、シテ由良氏御用とは」

大　星「外でも無い、そもじ何んぞ聞きやつたか」

定九郎「何んだか面白そうな窃々話し」

大　星「殘らず聞いたか」

定九郎「くどいこと」

大　星「南無さん身の一大事にこそ、なりにけり」

定九郎「ヤアポン〳〵」

ト大星は謠にて言ふ、定九郎は皷の眞似を口にて言い、二人顔見合せ。

大星「ハハヽ、聞いたと有れば是非も無い、倅力彌が初夜を打てば、何にか密事の御狀を持つて來るとの今の傳言、煩るさい〳〵見るも面倒、そもじ此處で大儀ながら、私の變りに受取つてたもらぬか」

定九郎「あの變へ玉でか」

大星「此の羽織を貴殿が召して」

定九郎「おかんせ嘘じや」

大星「嘘から出た誠よ」

定九郎「アノ拙者には」

大星「今用が有るなら身共が致さう」

定九郎「スリヤ誠よな」

大星「長くとは云わぬ、初夜まで一ト時」

定九郎「コリヤ有り難い」

大星「ヱツ」

定九郎「と云わして置いて笑ふと」

大星「左りとては疑い深ひ、誠の證據に此の羽織を」

定九郎「スリヤ初夜迄此處に」

大星「賴んだぞよ」

定九郎「夫れもたつた一ト時よな」

大星「一ト時立てば、怎うせ命は」

定九郎「ヱツ」

大星「アイヤ、どれお經の傍で命の洗濯」

ト立上りてヨロ〳〵とする。

定九郎「おつと危い」

大　星「足元もヒドロモドロの浮拍子」

定九郎「ア、テンツクテンツク、スツテンゝゝ」

大　星「俺れまつしや共」

ト上瑠璃になる。

『のれんになさで置くべきかと、騒ぎにまかれ』

ト宜しく科有つて、

『入りにける……』

ト由良之助は這入る、定九郎は後を見送りて。

定九郎「あの様な大馬鹿者だ、師直公へ内通する身共に、大事の密書を受取つて呉れよとは、日本一の阿呆の鏡、請取る手紙は褒美の金だ、甘い」

ト手を思はずポンと打つと、中に『あい〳〵……』と返事する。

定九郎「シツ……」

ト止める上瑠璃。

『山科よりは一里半、様子伺ひ嫡子力彌、内を透かして正體無き寝姿、父を思ひ詰め枕元に立ち寄りて、轡に代る刄の鍔音、鯉口やつと打ちならせば』

ト此の上瑠璃にて花道より力彌來り、寢て居る定九郎を起して切り戸口へ行く、定九郎は羽織を冠り切戸口へ良由之助の替玉なつて行く。

力　彌「ハア……御臺様より急ぎの御飛脚、密事の御用……

トふと姿を見て父でなき事に氣附き、誠の文みを隠して以前おらんよりの色文を渡して舌を出す、定九郎は請取り早く行けと手眞似で知らす

力　彌「ハハア……」

ト小腰をかゞめる上瑠璃。

『ハツトためらい、又もや舌をペロリと入りにける』

ト又舌をペロリと出して力彌ははいる、定九郎は夫れに氣附かず酔たる科にて後を見送り。

定九郎「ア、蛙の子は蛙と、親が親なら小伜も、現在傍の……」

ト云いかけて手を口に當てる、誂への唄になり。

『敵と見つし群れいる鴨目、時の聲と思ひしは浦風なりける、高松の〳〵』

ト此の唄の内に酔ふたる科にて本舞臺へ戻り來り。

定九郎「ア、酔ふた〳〵」

ト此の内以前の庄兵衛は椽の下へ這入り様子を見て居る、莚を頭より冠りて居る事。

定九郎「ア、こりや〳〵誰れも居らぬか、水を一杯〳〵、ア、仲居共も居らぬと見ゆるわへ」

ト上瑠璃

『當り見廻し定九郎、釣燈籠の明火をてらし』

定九郎「ヲヤ火が消へた」

ト火を消す上瑠璃

『眞暗闇に後や先き、シドロモドロで讀もせず、椽の下より庄兵衛が、繰り下ろす文月影に透し讀むとは神ならぬ、禿げた頭にフット氣がつき

定九郎「誰ぢや」

庄兵衛「私ぢや」

定九郎「ヤツ」

ト定九郎は庄兵衛を見て驚き逃げかける。

庄兵衛「己れ逃がして、たまるものか」

ト定九郎を捕へて一寸立廻りあつて定九郎花道へ逃げて這入る。

庄兵衛「ヲイ〳〵太皷持の衆來て呉れ〳〵」

ト言いつゝ花道へ定九郎追ふてはいる、此の後へ由良之助來りて。

大星「ヤア……取り逃したか」

ト行きかける處へ、下手より力彌ッカ〳〵いで來りて。

力彌「父上暫らく」

大星「白痴者め、密書を受取りしは父と思ふか」

力彌「其處にぬかりは」

大星「フム出して渡した手紙は」

力彌「下らぬ色文み誠の御手紙」

ト出して由良之助に渡す。

大星「ヲヽ」

ト受取り裾へ隱すが木頭

大星「でかした」

ト賬なる囃子にて道具一轉なす。

(3) 五段目の場

本舞臺中黒中遠見、松の立木澤山、中央に稲村等總て忠臣藏五段目の好み詰への囃子にて道具納る。

ト置上瑠璃

『またも降り來る雨のあし、一目散に定九郎』

ト定九郎花道より此の上瑠璃にて走り來る。

定九郎「既での事に骨折損になる處だ、椽の下から讀み居るゆへ、父斧九太夫かと思ひの外、飛んだ間違ひぢや、ドレ……褒美の金に此の手紙」

ト明火の處へ行き手紙を讀む。

定九郎「何に〳〵『恥しながら貴方樣に心底惚れ申參せ候』ヲヤ〳〵色文だと宛名は……何に〳〵……力彌樣參る、らんより……何んの事だへ」

ト落膽の科、誂へのドロ〳〵の太鼓になり狐いで來る、定九郎驚き火を消して稻村へはいる、狐は上手へはいる、再び定九郎稻村より出で來る時、鐵砲の音、定九郎はバッタリト仆れる、ト上瑠璃。

『狐打チ止めしと勘平が』

ト之れにて勘平鐵砲を持ち花道より走り來りてキットなる、上瑠璃

『鐵砲引提げ此處彼處……』

ト之れにて宜しく探りながら本舞臺へ來り、定九郎を探り見て

勘　平　「ヤツこりや人……」

ト驚き手紙を見て、

勘　平　「ヤツ五十兩と思ひの外、この手紙ナニ……大星力彌樣」

ト驚く途端火繩が消へる。

勘　平　「ヤツ火繩が消えた字が判らぬが、何にしろ樣子ありそうな、直ぐ之れより一力の大星樣へ、ヲヽ、爾うぢや」

ト切張りとなる、上瑠璃。

『身拵へする其の處へ、庄家庄兵衞太鼓持引連れて出で來り』

ト此の上瑠璃にて庄兵衞先に太鼓持四人つゞいて出る。

庄兵衞　「ヤア〳〵定九郎

勘　平　「違ひますせ」

庄兵衞　「ヲヽ、狩人ど」

一　八　「大事の手紙を持つたるは、矢張り一ツ穴」

五　八　「二ツ返事で渡せばよし、三ツ々々所持なす大事の密書」

三　八　「四つ夜目でも見のがすものか、四の五の吐かせば爲にならぬ」

九　八　「六ツ無理ぢやと吐すが最後」

一　八　「七ツ何んでも取つかまへて」

庄兵衛「八ツ八ツ割きふん捕らまへて、九ツ取つかまへてキュ――……十々惡ひと誤るか……十をか何うか」

上『詰め寄つたり』勘平フット吹出し、

勘　平「ヤア騷しい野太鼓めら、狸と云われた太鼓持、獵師稼業此方人等に、態々尻尾を見せに來た、命知らずの狸汁、甘ひか不味か勘平の、料理甘味喰ろうて見よ」

上『大手を擴げて詰め寄つたり』

庄兵衛「ソレ……」

皆　々『ハア……』

ト之れにて太鼓持は勘平に打つて掛る、處へ以前の狐來リドロ〳〵の太鼓になり何れも欺されたる心地にて舞臺一轉して暗闇となる、丸の大なる穴を明けて其中丈け電燈を照す、勘平は鐵砲を持つて其中へはいると、狐庄兵衛も連いて其の中へはいる、之れに三人眞形となり庄家拳の格好になるが木頭、宜しく面白味なる科にて、此模樣宜しく。

滿來

【第一】　の　二　瓜

瓜二つ

中山隱居宅の場

登場人名

【俳優】

隱居　中山おかつ　五郎
同人弟　濱村彌兵衛　太郎
同家下女　おたに　大磯
同家下男　留吉　蝶七
羅宇仕替　田邊文藏　蝶六
芝居の表方　喜助　五樂
同　三太　長佐久
同太皷打　駒吉　五良丸

中山隱居宅の場

本舞臺上手庭を經たる廊下、奥へ通ずる出入口、正面床の間、違ひ棚、軸置物等、正面、瓦燈口、下手茶壁に唐木の茶棚、其の上に提燈箱、下手小家根附きの意氣な格子の門口、表口町家の背景、總て中ノ隱居所の場面誂への囃子にて幕明く。

ト中央唐木の机の上に先夫老人の油畫を立てかけ、其の前に夫婦膳を据へ有る、表口には駒吉は喜助、三太の兩人に太皷を持たし、芝居の振れ太皷を打ち居る、宜き處へ奥より留吉盆の上に祝儀包を載せて持ち來り入口を明けて、

留吉「ヘイ御祝儀」

喜助「毎度有り難ふ御座ります」

留吉「マア喜助はん御這入りなはれ」

喜助「ヘイ大きに有り難ふ」

ト内へ入りて一寸腰をかけて、

喜助「今度は是非何卒御見物に、御越し下さいますよう、久々の舊芝居で偉い前

景氣で御座りますでな」

留　吉「サア好な芝居も此頃は、知ての通り親旦那が死んでから、お家さんも髪をおろして、餘り外出もなさりませんので、ツイ〳〵芝居も御無沙汰ぢやがな」

喜　助「成程爾うで御座りまするなア、親旦那がお薨れになつてから、モウ三月もなりますかいな」

留　吉「此の間百ケ日が、濟んだのぢや、宜い旦那様ぢやつたなア、惜しい事を仕ましたわい、何つも此の様にニコ〳〵と笑ふてなア」

ト上手の油畫を指す。

喜　助「成程親旦那の油繪で御座りますな、マア〳〵前へお膳を据へて、今日は御命日で御座りますかいなア」

留　吉「イ、ヤ御命日ぢや無いが、毎日々々お膳の前へ、怎ふ立て掛けて、内の御家さんが差向ひになつて、喰べなさるのぢやがな……」

喜　助「貞女な者で御座りますな、死んだ親旦那は御仕合せぢやなア」

留　吉「貞女は御仕合せか知らんけれども、毎日々々、阿呆らしいて、遣つて居られんわ、誰を見ても、死んだ親旦那の惚ろけ斗り飯喰ふにも、此の油畫と差向ひで、イチヤ〳〵言ふて、そりや受けて居られんわ」

喜　助「イチヤ〳〵云ふとは、阿呆らしい一人でイチヤ〳〵云へますかいな」

留　吉「サア其處が、阿呆らしいのぢやがな、生きて居る人に物云ふ様に、サアお上り、サア御酌仕ませふなんて、丸で氣狂ひやがな」

喜　助「成程人情なものだすな、雀百まで、踊を忘れぬとやらで、矢張り死んだ旦那が、戀しいのだすなア」

留　吉「なんぼ戀しいと云ふてもあの年やがな、モウ五十六にもなつて、然かも頭を丸るめて、惚ろけを云ふやもの、なんぼ奉公人でも、聞いて居られんわ、カアト熱が出て來るぜ」

ト此の少し以前より隠居おかつ、坊主頭、着流しにて出で來り一寸立聞きして居り、此の時ヌート前へいて來りて。

おかつ「熱が出たら、熱さましを、呑んでや」

ト之れにて喜助、留吉はハツトしたる科にて互に顔見合す。

おかつ「留吉偉ひ濟まんな、他人さんの惚ろけを云ふのぢやなし、旦那さんの惚けを言ふのが惡ひのか、御氣に觸つたら勘忍してや。なア旦那はん」

ト油畫の前に艶かしく座わる。

喜　助「イエお家はん今も、お話を聞いて、感心して居りますのぢや、死んだ御連合が、戀しいと、毎日惚けを仰在るとは、美しい惚けだすなア、詰り貞女の鏡だすなア」

おかつ「イヽエ爾う云われると恥しいが、四十年足らずも、添ひ遂げて、世間から鴛鴦とまで言われた夫婦中、其れを先へ死なれまして、夫りや貴方戀しいのふてかいな、惚け位ひ云いとふなりますわいな」

喜　助「エヽ爾うで御座りますとも、其の惚けは坊さんの、死んだ旦那は、嬉しふ聞いて居られますわいなア」

おかつ「まあ喜助はん、貴下は苦勞人やは、調子に載つて言ふ譯やないけど、旦那はんが死んで一週忌も立たぬ内に、再緣する人も有る世の中に、頭丸めて惚け云ふて居るのは、一寸とも、世間へ恥しい事は無い積りやわ」

留　吉「夫れやお家はん、當り前だすがな、頭丸めて五十六になつて、再緣すると仰在つても、貰らひ手がおますかいな、仕樣も無いなア」

おかつ「旦那はん留吉が、あんな事を言ひますがな、叱つとくなはれい」

ト油畫に向ひ甘へる樣に云ふ。

喜　助「馬鹿ツ、何にを吐すのぢやへ」

おかつ「ヒヤー油畫がものを言ふた」

留　吉　「阿呆らしい、今のは喜助はんだすがな」
おかつ　「まあ喜助が言ふたのか」
喜　助　「へイ旦那に代つて一寸叱つて置きます」
おかつ　「大きに憚りさん、サア煙草でも買うとくなされや」
　ト札を紙に包んで投げる。
喜　助　「へイ毎度有難ふ御座ります」
　ト捨白詞にて表へ出る跳への囃子になり喜助先きに三人は下手へ這入る。
おかつ　「これ留吉、茫然りせんと、早ふお酒を漬けなはらんか」
留　吉　「へイお酒は今お谷どんがつけています」
おかつ　「ア、爾うか。旦那今來ます依つて、一寸暫らく待つとくれやすや。今日はしけで御馳走がおまへんのやがな、之れで我慢しなはれや。厭やだすか、堪忍してお呉なはれいなア」

　ト油畫に向ひ人に物を言ふ如く語る。
留　吉　「モシ近所が笑ひますぜ、何にを言ふてなはるのやいな」
おかつ　「デモお肴が、氣に入らぬと、無理斗り、云やはるのやがな」
留　吉　「誰れが、無理を言いますのやいな」
おかつ　「旦那はんがいなア」
留　吉　「阿呆らしい、油畫が其麼事を云いますかいなア」
おかつ　「夫れでも、爾ふ云ふて御座る樣に、聞こゑるのやがな」
留　吉　「阿呆らしいて、聞いて居られんわ」
おかつ　「聞いて居られねば、彼方へ行きなはれ、今の間に、先裁でも、掃いときなはれ」
　ト之れにて留吉は眼れ面をして立上がる。
おかつ　「これ旦那に、御挨拶をして行きなはらんかいなア」

ト留吉は無言の儘一寸頭を下げて、上手へツカ〳〵とはいる、同時に中央より下女お谷銚子を持つて出て來り。

お　谷「へイ奥様、遲なりまして、お酒」

ト銚子を前に置く。

おかつ「ヲ、御苦勞さん、私しは大事ないが、旦那はんが、八ケ釜敷い言いはるのやがな」

お　谷「旦那はんいな、其なんに仰在りますないなア、私が仕度が、遲れましたのだすさかい、堪忍してお呉れやすや。何に可愛けりやこそ。おかつに、無理も言いとふなるわへ。アツ左様か……」

おかつ「これお谷、何にを云ふて居るぢやいな」

お　谷「イヽエ、旦那様が爾う仰在る様に思ひますのやがな」

おかつ「嬉れしやの、何ツも其の様に云ふて、無理斗り言われたのやわ、其麼時には、嬉れしいて〳〵、ナア旦那はん」

お　谷「ほんに、爾うだしたなア、何ツも子供見たいに、無理斗り態と仰在つて。これかつ、モウ、一杯呑ませ、呑まさねば浮氣しに行くぞ、と何ツも醉ふと、無理斗り仰在りましたなア」

おかつ「サアあんな時が、一番難儀やわ、餘り呑むと又頭が痛ふなりますがな」

お　谷「痛なつたら、又お前が介抱すれば、宜いぢやないか」

おかつ「デモ貴方苦しいおまんがな」

お　谷「お前へに介抱さしたさに、今日は態と呑んだのぢやわい」

おかつ「ヲヽ、嬉しやのふ」

二　人「ヲホヽヽ」

ト互に顏見合して笑ふ。

お　谷「何ツも此の通りで御座りましたなア」

おかつ　ほんに、思ひ出すわ、サア旦那お一ッ。呑みなはれいなア……お酌しますわ」

お　谷「奥さん、旦那はんお寒ひ事は、おまへんやろうか」

おかつ「何んでいなア」

お　谷「デモ夏の御召物だんがな」

おかつ「そりや夏書いて貰ふた、油畫やもの、仕方が無いやないか」

お　谷「まあ水臭やの、なんぼ夏書いた油畫でも、モウ寒なつてますのに、風引きはりまんがな」

おかつ「大きに、御親切に、宜ふ云ふて呉れる。一寸待つてや」

ト立上り箪笥より十徳を出して油畫の後より着せる、

おかつ「貴下風引きなはんなや」

お　谷「奥様御馳走様」

おかつ「お谷堪忍してや」

お　谷「ドレお銚子の、お變りを取つて參りませう」

ト宜しく面白味にて中央へはいる、誂への囃子になり濱村彌兵衛下手より出て來り、内這入へりかけると、おかつの聲を聞き首をかたむけて、立聞きする。

おかつ「旦那はん、貴方何んで死になはつたのやいな、何んの樂しみも無い、恁麼浮世に私し一人殘して、水臭ひ御方や、私もなア、貴下の葬式を出した後で、直ぐに死のふと思ひましたけれどなア、本家の倅夫婦も止めますし、殊に分家の濱村の親父がなア、病氣で死ぬのは仕方が無いが、變死をして呉れては、中山家の名譽に掛わると、云うて止めますのやがな、夫れで貴下の傍へも行かれまへんのやがな、然し浮氣はしてしまへんで。此の頭を褒めとくなはれ、恨んどくなはんなる。恨みが有れば、分家の傍へ迷ふて出て、恨めしいと云いなはれ」

濱　村「厭やぢやて、堪忍しておくなれや」

ト入口を開けてヅーウとはいる。

おかつ「ヲ、まあおあがり」

ト濱村は上りて上手の座蒲團へ座りかける。

おかつ「其處は旦那はんの、座蒲團やがな、穢たなやなア。此方へ〳〵。サアおしき」

ト外の座蒲團を出す。

濱　村「イヤ構ひなさんな、然し姉さん今表で聞いてたら、死んだ兄さんに、俺れの傍へ化けて出樣なんてッ、厭やな事言いなはんないなア」

おかつ「聞いてたのかいなア、夫婦の內證事を、聞いたりするものやない、宜い年をして人に笑われますぜ」

濱　村「阿呆らしい、貴方の方が笑われるがな。何んぢや、油畫に十德を着せて、色氣狂ひぢやがな」

おかつ「一寸、家の人いな、分家が色氣狂やと云いますがな〳〵」

ト油畫に向つて艷かしく言ふ。

濱　村「モウヱ〳〵、惡かつた〳〵。其の聲聞かされると、二三日頭が痛むのぢや」

おかつ「氣の毒やの、其んなら、何にも此の隱居へ、來いでも宜いやないか、旦那はんも怒つてはるがな」

ト油畫を床の間へ裏向けに置く。

濱　村「私も成丈け、來ぬ樣にはして居るのぢやが、今日は一寸相談が有つて遣つて來たのぢや、外ぢやないが、モウ兄貴も死んで百ケ日も立つたよつて、本家の夫婦とも相談の上でな、御骨を本山へ納めて仕舞と思ふてなア、其れで相談に來たのや」

おかつ「御心切に大きに。然しモウお骨は納めました」

濱　村「夫れは一寸とも知らなんだ、何處へ納めなさつたなア」

おかつ「私のお腹へ……」

濱　村「ヱッ、お前さんの、お腹と云ふと、何處ぢやい」

おかつ「お腹と云へば、爰やがな」

ト自分の腹を指で押して。

おかつ「葬式の翌日、骨上げに行つてなア、持つて歸ると、其の儘、ほうろくで、黒燒にして、お酒で、グツト呑んで仕舞ふた」

濱　村「丸で、竹木刺拔藥ぢやがな」

おかつ「甘味しいかつたわ、お前にも、伜にも少し呑まして遣らうと思ふたれど、甘味しいよつて、一人で呑んだ、惡ふ思ふてなや」

濱　村「誰れが惡ふ思ひますかいなア、何處の世界に佛のお骨を、呑む人が有るかいな、餘りする事が無茶過ぎるがなア」

おかつ「何にが無茶ぢやいな、お前死んでも、墓へは遣らぬ、燒いて粉にして酒で呑むと、歌にさへ、唄ふぢやないかいな」

濱　村「コレ大概にして、おきなされや、何んぼ連合に、死に別れたからとて、六十近い身で、頭丸めて、見る人觸る人に惚け斗り、上句の果ては、お骨まで呑んで仕舞ふたとは、世間へ聞こへたら、中山家の名譽に關るぜ、娘も養子に、怎の位ゐ氣兼して居ると思ふて居なさるのぢや、之れ私を見なされ、一昨年あゝして、戀女房を死なしたけれど、ア、淋しいと思うてもなア、人に死んだ女房の惚ろけ一ッ言ふた事は無いのぢや」

おかつ「其處は男と女御と違ひます、又貴方は、惚を云ふ柄ぢやおまへんがな」

濱　村「柄で惚けを言いますかいな、これ啼く蟬よりは中々に、鳴かぬ螢が身を焦すと云ふ事を知つて居るか、私は惚けと云はいでもなア、夫れ以來、後妻も貰らはず、浮氣もせず、女の傍へ寄らぬと云ふのが、之れが本まの、佛への供養ぢや

姉さんの様な事をしていたら、死んだ佛が面目ないと、冥土で恥を掻ひて居るわへ」

おかつ「何んぼなと、虐めとくなはれ、此の惚氣言ふ丈けが、樂みで生きて居るのに、其麼連れ無い事を、言ふて呉れいでも、宜いぢやないか、生きて居る人の、惚氣さへ、氣兼のふ、言ふ人の多い世の中に、死んだ人の、惚氣を言ふて、なんで世間が笑ひます、あんまり變な燒餅を燒きに來ておくれな、朴念人で、女の心が判るかいなア」

ト之れにて濱村は煙管を納めて立上り、

濱　村「姉はん當分宜ふ來まへんわ」

ト呆れた様に云ふ。

おかつ「へェ〳〵當分と云わんと、ズツト來んと置いとくなはれや」

濱　村「二度と此の敷居を、跨げるかい」

ト表へ出る。

おかつ「これ分家、帽子が忘れて有るがな」

ト之れにて濱村は帽子を内へ取りに這入りかける。

おかつ「これ又敷居を跨げるのかいなア」

濱　村「フム……。跨げるかい、放つてくれ」

おかつ「御免やす……。ヲホ、、、」

ト帽子を投げる、誂への囃子になり、濱村はプン〳〵怒つて、下手へ入る、同時にお谷銚子を持つてヌート、いで來り。

お　谷「奥様、又御分家が、厭やな事を言ふて、來やはりましたなア」

おかつ「ほんに、あんな煩ひ人は、有りやせんわ、其れでも、二度と來ぬと云ふたゆへ、大助りぢや」

お　谷「ほんに爾うで御座ります、折角油畫と、しんねこで、一杯召し上つておい

でなさるのに、偉ひ邪魔を仕に見へてなア、屹度歸りは、馬に蹴られて、死んで
はりまつせ」

おかつ「違ひないぢや」

二　人「ヲホ、、、」

ト笑ひになると、變つた囃子になり、揚幕より、羅宇仕替へ田邊文藏、爺の拵へ羅宇仕替への荷を擔ぎ、

文　藏「羅宇仕替へ〳〵」

ト云ひツ、本舞臺へ來る。

おかつ「羅宇仕替へやさん」

文　藏「へイ〳〵」

ト荷を下ろす。

おかつ「これお谷・此の煙管、詰つて居るのや、一寸仕替へて貰ふて」

お　谷「ハイ〳〵」

ト長煙管を受取つて入口を開け。

お　谷「羅宇屋はん、之れ仕替へて、おくなはれ」

文　藏「へイ〳〵」

ト受取るお谷は其の顏をジツト見て。

お　谷「マア〳〵〳〵。一寸待つとくなはれや」

ト元の處へ戻り來りて。

お　谷「奥様々々一寸あの、羅宇屋はんを、御覽なはれ、死んだ旦那はんと瓜二ツだすがなア」

おかつ「エツ何處に……」

ト立チ上り下手入口の傍へ來りてジツト見て。

おかつ「ヲ、まあ……」

ト文藏の手を取つて、中へ入れて、顏をジット眺める、文藏は不審らしき思入れ。

おかつ「お谷怎うや、目元といゝ、口元といゝ、體の格好、頭の禿げ工合まで、何處から見ても、旦那はんや、まあ〳〵上つとくなはれ〳〵」

ト無理に座敷へ引張り上げて。

おかつ「まあ〳〵似た言ふても瓜二ツ、此の手先きまで似て居るがな」

ト文藏の手先きを觸る。

文　藏「何んぢや知らんが、氣味の惡ひ、モシ此の手を放しておくなはれ」

おかつ「まあ、あゝ言ふ口元、聲迄其の儘やがな」

文　藏「モシ何んぢや知らんが、惡るけりや、誤ります、堪忍しておくなはれ」

お　谷「イヽヱ、羅宇屋はん、何にも誤つて貰ふ事は無い、實は內の奧樣が、死に別れた旦那樣と、餘り貴下が宜ふ似て居るので、懷かしさに、這入つて貰ふたのぢやがな」

文　藏「ヘエン……怎麼顏に、旦那が似てはりますのかいな」

おかつ「モウ似たと言ふより、旦那はんが、生きて歸つて呉れはつたやうな氣がします、何卒濟みませんが、宜ふ顏見せておくれなはれ」

文　藏「ヘイ〳〵、御粗末な顏ですが、何んぼなと、見ておくれなはれ、然し私に似たとは、旦那はんは、餘り好い男やおまへんなア」

おかつ「男前は貴方と一緒で、決して美男子と云ふ譯ぢやおまへんが、福々しふ肥つて、何處やら愛嬌の有る處まで、貴方に、其の儘、失禮ながらお幾ツ」

文　藏「ヘエ六十五になります」

おかつ「まあ〳〵。これお谷年も同じ年やがな」

お　谷「まあ〳〵、不思議な事、矢張り內の旦那はんの樣に、宜ふ働きなはるお方だつしやろうな」

文　藏「ヘイ娘が一人御座りますが、子供の足を囓ぶるのは、自慢にもならんと思

うて、セツ〳〵と毎日働ひて居ります」

おかつ「まあ氣立ても同じやがな、恰度内にも、娘が有つて、あゝして養子がして有つても、我が子の足囓ぶりは自慢ぢやないと、何ツも仰在つたぢやつた、何處まで貴下は似て居るのやら、爾うして、羅宇屋はん、貴方はん、嫁はんを可愛がりなはるやろうなア」

文藏「ヘイ婆も五十六になりますが、今に夫婦喧嘩一ツした事はなし、私の物より婆のものを、何ツも買ふて遣つて居ります」

おかつ「何にもかも、一緒やがな、休みなつたら、二人連れで、遊びに行きなはるやろうな」

文藏「ヘイ〳〵今ではモウ其れが、樂みで、何ツも二人で、遊びに行きます」

おかつ「同じ事やがな、謠の會も一緒だつしやろふ」

文藏「謠の會なぞへ、行つた事はおまへんわい」

おかつ「嘘言ひなはれ、何ツも一緒に行きましたがな」

お谷「奥さん〳〵、其りや家の旦那はんと、貴方はんだんがな」

おかつ「ヲホ爾うか〳〵、モウやゝこしなつて來た。モシ羅宇屋はん、貴下失禮ながら、毎日何んぼ、儲けなはるのや」

文藏「ヘイ多寡が、羅宇仕替へ屋の事だすもの、宜い日で三圓も有れば、珍らしいと、何ツも婆アと喜びますのぢや」

おかつ「誠に焦麽、無仕附な事を、御願いして、濟みませんけれど、毎日十圓宛の日當で、一時間程私の家へ、飯丈け喰べに來て貰へますまいか」

文藏「ヱライぼろい、話しだんなア、飯喰べに來て怎うしますのや」

おかつ「イヽヱ怎うもして貰らわいでも、よろしいのや、恥しながら、死んだ旦那はんの事が忘れられずに、あゝして油畫と、差向ひで毎日、飯を喰べて居ますけれども物も仰在らず、動きもなさらず、まあ便りないと思ふて居ますの、其れで

貴方に來て貰らへば。ヲ、恥かし。お谷後云ふていなア」
ト一寸恥しき科

お　谷「生娘の樣に何んだすいなア、アノ羅宇屋はん、別に色の戀のと云ふ譯けやなし、貴下と夫婦には無論なる譯ぢやなし、ほんの奥樣の、お氣休めに、毎日一時間ほど、十圓の日當で來て上げておくなはれいなア」

文　藏「ヘイ〳〵來ますとも〳〵、まア呼ばれて十圓の日當とは、此の世智辛ひ世の中に、恁麼、ぼろい事が御座りますかいな。何卒奥さん、何ッ迄も使ふて遣つて、おくれなされませ」

おかつ「まあ〳〵嬉しやの、サアまあ〳〵此方へ來とくなはれ」
ト上手へ大座蒲團を敷き其の上に座らせる。

文　藏「何事おまへんかいなア」

おかつ「何んの毎日、此處へ座つて貰らいますのやで」

お　谷「夫れが貴方の仕事だんがな」

文　藏「餘り話が、ぼろすぎるなア」

おかつ「怎ふや、あゝ仰存る、物の言ひ樣、其の儘やがな」

お　谷「然し奥樣、旦那はんは、あんな着物と違ひますがな、一寸待ちなはれや」
ト上手へ行き以前の十德を文藏に着せる。

お　谷「一寸之れを着ておくなはれ」

文　藏「大事おまへんかいなア」

お　谷「遠慮が入るかいなア。サア座つて御覽。怎うだす奥樣……」

おかつ「まあ其の儘やがな、一寸待つておくなはれや」
ト立上り、違棚の帽子箱より帽子を出して冠せる。

おかつ「お谷怎うや……」

お　谷「まあ〳〵、旦那はんと、言ひとふなりまんがな」

おかつ「云うとくれいな、〳〵」

お谷「旦那はん」

おかつ「貴下返事しとくなはれいなア」

文藏「私が旦那と、云われて返事が出來ますかいなア」

お谷「夫れが、貴下の仕事やがな、旦那はん」

文藏「ヘイ……」

おかつ「ヘイなんて、言わずに、何んぢやとゆふとくなはれいなア。お谷モウ一度言ふて見い」

お谷「ヘイ……。旦那はん」

文藏「何んぢや」

おかつ「嬉れしやのふ、旦那はんお一ツ」

ト盃を差す。

文藏「ヘイ大きに――」

おかつ「其麼事を言わずに、ヨシと云ふとくなはれいなア」

文藏「ヨシ――」

おかつ「おかつと、一遍呼んどくなはれ」

文藏「おかつとは、何誰だすいな」

お谷「何誰でも宜いがな、言ふのが貴方の仕事やがな」

文藏「おかつ……」

おかつ「ハイ……」

文藏「一杯いこうか……」

おかつ「ヲヽ、嬉れしやのふ」

ト此の時上手より留吉ツカ〳〵と出て來り、

留吉「お谷どんお客さんか」

お谷「留はん、あの御方見て見なはれ。旦那はんによふ似て居るやないか」
ト留吉は文藏の顏を見て。

留吉「アヽほんに、旦那に宜ふ似て、面白い顏やなア」

おかつ「留吉家の旦那はんが面白い顏か」

留吉「旦那はんや、おまへんがな、其の人だすがな」

文藏「似てたら同じ事ぢやわい」

留吉「誠に失禮を。お谷どん何んと言ふお方や」

お谷「エヽ、奥樣、お名前は何んと仰在ります」

おかつ「知らんがな」

文藏「田邊文藏と申します」

留吉「ヘイ、御商賣は……」

文藏「羅宇仕替ぢやわい」

留吉「ヒヤ――」
ト据るが木頭。

文藏「おかつ一杯注いで……」

おかつ「ハイ――」

お谷「留はん表の荷を內へ入れて置きなはれ」
ト誂への囃子になり、留吉は、不思議相に、表の荷を內へ入れる、文藏、おかつは、睦じく酒を呑みかわす、此の模樣宜しく。

滿來

停　　電　【一場】

某電車停留場交叉點の場

登場人名

車掌　植山五郎
同　松井時丸
運轉手　田中蝶六
監督　村山長佐久
乘客　電信工夫五六
同　職人小二郎
同　高利貸五兵衛
同　産婆五良丸
同　プロレカリー笑將
同　田舍者蝶七
同　無頼漢致雄
同　掏摸蝶の丸
同　荷物持たる女喜久蝶
同　女房おとく大磯
同　世話好の男五榮
同　女髮結一福
令嬢　美惠子二三雄
藝者　いろ香林蝶
客人　平戸太郎
産婆を呼びに行く男　越谷蝶入
小僧　蝶太郎
撒水夫　三郎

【俳優】

荷物持たる女の亭主
其他乘客通行人

某電車停留場交叉點の場

本舞臺平舞臺。正面町家の遠見。中央橋を見たる背景。平舞臺に電車線路を見せ、舞臺中央に一臺の電車停電なし居る。稍々下手正面より、パノラマ式に電車一臺停電なしおる。其の前に電柱を立て、監督室、及び自動電話室等有る。總て電車交叉點、停電の模樣宜しく、誂への鳴物にて幕開く。

ト乘客は何れも電車内にてワア〳〵と騒ぎ居る。其の内、車掌は下手へ行き監督と話をして居る。正面の電車より乘客は降る體等宜しく、雜踏なし居る。車掌植山は、監督と話を終りて、電車の傍へ來りて、

植　山　「何誰も暫らく停電で御座ります」

無賴漢　「オイ〳〵停電々々で先刻にから、モウ餘程なるやないかい、怎うなるね怎うなるね」

一乘客　同　「皆急ぐよつて、電車に乘つて居るのぢやい。監督に聞いて、電話で發電所へ問合したら怎ろや」

ト口々に云ふ。植山は再び監督の前へ行き、小聲にて話しながら元の處へ來りて、

植　山　「お氣の毒ですが、暫らくお待ちを願ひ升」

無賴漢　「仕樣がないな」

ト窓から顏を出して、

「ヲイ新聞屋々々〳〵」

新聞屋　「夕刊々々、朝日、毎日、萬朝・時事」

無賴漢　「一枚呉れ」

新聞屋　「ヘイ……」

ト新聞を渡す。無頼漢は新聞を買つて代金を拂ふ。此の時田舎者はアッと大聲出しながら、逃げて降る掏摸に附いて降りる。掏摸は帽子眼深に冠り、顔を隠しながら、舞臺を二回程上下へウロ〳〵とする。田舎者は自分の腰の莫入を探ぐりながら、附き歩き中央にて捕まへて、

田舎者「コラッ……」

掏摸「何にをさらすのぢや……サア返してやらア、とつとけ」

ト懐中より二ッ折の紙入を地上に投げ捨てゝ、一目散に花道へ逃げ込む。乗客はワアワアと騒ぎながら、ブローカーは、降りて、田舎者の傍へ行き、

ブローカー「もし何か奪られたのですか」

田舎者「ヘイ彼奴め……」

ト掏摸の捨てし紙入を拾ひながら、

田舎者「足を踏みよつて、其拍子に奪りよつたので」

ブローカー「氣を附けなはれ、貴方は大阪の人ぢやないねえ」

田舎者「ヘイ丹波の綾部だす」

ト言ひながら、手にせる紙入を見て、

田舎者「アッこら違ひます、私のと」

ト言ひながら前へ出す、ブローカーは、見て、

ブローカー「オヤッ……」

ト自分のポッケトを慌てゝ探し、其紙入を取つて見て中を開き、

ブローカー「イヤ有難う、之りや私のです」

ト電車に乗る、田舎者は掏摸の跡を追ひ行かんとする。植山は車掌臺の莫入を拾ひて、

植山「モシ〳〵此の莫入は貴方のぢや有りませんか」

ト示す。田舎者は振返りて、

田舎者「大きに憚りさん、私のだす」

皆々「阿呆かい、狼狽者めッ」

植山「懐中物に御要慎を願ひます……」

荷物の女「ナア電車屋はん、まだ〳〵動きまへんのか」

植山「私にはわかりません」

女「其麼便りない事がおますかいな」

植山「怎うも致方が御座いません……」

ト冷淡なる科、

女「便り無い人やな、モウ降りますわ」

ト切符を渡して下へ降りて、

女「一寸其荷物を降ろしとくなはれ」

植山「之れですか、怎うも困りますな……怎麼大きな荷物を二ツも持つてお女中が乗るなんてッ」

女「愚圖々々云ひなはんないな……貴方乗る時に默つて居たやおまへんか、一寸降ろしておくなはれ……」

植山「困りますな、怎麼大きな荷物持つて、七錢で……お女中が」

女「何をゴテ〳〵云ふてなはんね、早う降しとくなはれ、急ぎまんねよつて」

ト此の内植山は、大きな信玄袋を車掌臺から下へ投げる様に降す、

女「投りなはんな、中の物が割れますがな」

植山「之れもですか」

トバスケットを降す、

女「困たなア、車屋はんも居へんし、難儀やな。怎麼處で停電をしたりして」

トブツ〳〵云ひながら荷物を持たんとして居るを、世話好きの男は車掌臺へ出て行つて

男「姉はん、モウ少し待ちなはれな……」

女「へエ大きに……けど急ぎますよつて」

男　「其れでも車屋も居まへんしな……」
ト電車より降りて、荷物を一寸提げて見て、
男　「コラ重い、お女中が迎も持つて行かれしまへん。貴方何處まで行きなはるのや」
女　「へイ福島の三丁目迄行きまんね」
男　「迎もそらいけんわ。私持つて行たげます」
女　「えらい氣の毒だすな」
男　「何に構えしまへん」
ト荷物を振分にして擔ぐ。車掌はニヤ〳〵笑ひながら、
植山　「モシ〳〵貴方々々」
男　「私かいな……」
植山　「爾うです、貴方降りるのですか」
男　「フム降りるわ」
植山　「ジヤ切符を頂きます」
男　「オイショ……」
ト袂より切符を出して渡す、
植山　「貴方梅田へお越しですが、福島とは方角が違ひます」
男　「放つとけ、氣の毒やで持つて行て上げるのぢやい、ゴテ〳〵言ふない」
植山　「御親切に……何誰も懐中物を御要慎願ひます……」
男　「變な事を云ふなえ」
ト此の時乘客は窓より顔を出して、口々にワイ〳〵言ふ。此の内世話好きの男は荷物を擔いで歩き出す、
田舍者　「モシ貴方、赤帽になりなはれ」
男　「ほつとけ」

無頼漢「荷物が持ちたけりや、仲仕をせい」

工夫「えらい親切な人やな」

ト宜しくからかふ。此時花道より亭主來りて、花道附際で出合ふ。

亭主「待つて居るのぢやないか、何をして居つたのだ」

女「停電だんねわ……」

亭主「兎に角早う歸らう……」

ト世話好きの男が持ち居る荷物を見て、

亭主「あの方は……」

女「へエ車屋も何にも居まへんので、彼のお方が持つて送つてやると云ひはりましてな」

亭主「夫りや濟まん、御親切に……」

ト傍へ來りて、荷物を取りながら。

亭主「色々と御親切に、怎うも有難う御座いました……」

男「貴方は……」

亭主「ハイ之れは私の妻です」

ト荷物を持つて、兩人に滿に揚幕へはいる。一同は之れを見てワア……と笑ふ。無頼漢は電車より降りて、呆然と見て居る世話好きの男の前へ行き、

無頼漢「オイ、汗をふけ、好い年をしやがつて、出齒龜」

男「ほつとけ、何を吐すのぢや、讀めもせん新聞を買ひやがつて」

ト云ひながら、電車に乘りかける、

植山「モシ〳〵貴方お乘りですか」

男「爾うや、乘るのぢや」

植山「ぢや切符をお買下さい」

男「オイそんな事を言ひないな、今……一寸其處迄……そんな薄情な……」

植　山「イヱ一度お降りになりましたら無効です。何卒切符をお求めを……」

皆　々「買へ〳〵……」

ト騒ぐ。

男　「そんなら買うたら宜えぢやないかい」

ト袂より鈔を出して渡す、此の内無頼漢は新聞を小腰になつて見て居る。おとくは電車内にて莨を吸ふ、運轉手は見て、

田　中「モシ〳〵莨をお止め下さい」

おとく「停電中は構はんやおまへんか」

田　中「いけまへん、電車規則です。お止めを願ひます……」

おとく「ごて〳〵いゝなはんな、投つたら宜しやおまへんか」

ト窓より卷莨の吸さしを投げる。無頼漢の頭へ當る。

無頼漢「熱い……どいつぢやえ、氣を附けさらせ、唐變木め」

ト後を向く。おとく邊りの人に氣を兼ねながら、濟まん許して呉れとの表情をする、

無頼漢「貴方だすか、イヤ怪我のはずみだす……」

ト其卷莨を拾ひ吸ひながら電車へ乘らんとす、

植　山「モシ〳〵莨はいけません」

無頼漢「捨てたら、ゑゝやないかい」

ト莨を捨てゝ内に入る、此の時上手より平戸は商人體にて、藝妓いろ香を連れて通るを中よりおとくは見て、

おとく「ア、モシ〳〵、平戸はんやおまへんか」

平　戸「ヘイ爾うです、何誰」

ト振向く時、おとくは下へ降り行く。平戸はおとくの顏を見て、極り惡き科、

おとく「貴方何處へ行きなはんね……神戸へ行くと言ふて家を出ながら」

ト藝者を睨め附けて、

おとく「あんな者を連れてほんまに……神戸が大阪の眞中へ何時出來ましたのやサアサアお歸り〳〵」

ト背を突く。平戸は藝者に目配をして、女房で有ると知らす。いろ香は少し傍へ來かゝるをおとくは、

おとく「エッ此の女も圖々しい」

ト飛附く勢を見せる。いろ香は其の權幕に恐れて、下手へ退く、

おとく「何にを愚圖々々して居なはんね・サア歸りまよう〳〵」

ト平戸を突きながら、上手へ行きかける。田舍者は電車内より、女持の洋傘と土產物の包を出して、

田舍者「姉はん〳〵」

おとく「何んだんね」

怒氣を含んで云ふ、

田舍者「之れ貴方のと違ひますか」

ト云はれて、少し體裁惡き科にて、

おとく「夫れ見なはれいな、忘れてまんがな……貴下はん大きに……一寸取ッとくなはれ」

ト之れにて平戸は無言の儘窓際へ行き、一寸頭を下げて受取る。

田舍者「大抵やおまへんな」

平戸「……」

植山「モシ〳〵、貴方降りるのですか」

おとく「ヘイ降りまんね」

植山「ぢや切符を頂きます」

おとく「ヘイ〳〵」

と帶の間より切符を出して渡し居る内に、平戸の傍へいろ香は來りて、小聲にて何處か

で待つと云ふ。平戸は無言の儘首肯く、おとくは之れを見て、

おとく「エッ……又そんな事、モウ〳〵貴下と云ふ人は……私と云ふ好い女房を持ちながら……歸りなはれ〳〵」

ト突き飛ばす、

植　山「曲りますから御注意を願ひます」

おとく「ほつときなはれ」

ト捨白詞にて平戸を上手へ突きながら這入る、跡にいろ香は其の後を見て、

いろ香「一寸旦那……旦那はん」

ト此の時、高利貸は窓より顔を出して、

高利貸「オイ〳〵いろ香はんやないか」

いろ香「アッ……」

ト惡き處で逢ふたと云ふ科、其の内高利貸は降りて行き、

高利貸「コレ〳〵今お前はん處へ行たら、又留守ぢやがな。サア一寸私と一緒に家まで來ておくれ、今日が期限やで……」

いろ香「濟まへんけど、明日家へ來とくなはれ」

高利貸「不可ん〳〵、何時でも留守ばかりぢやがな」

ト厭がるいろ香の手を取つて、無理に上手へ連れ行かんとする。乘客は口々に、

乘　客「相手が女ぢやがな、待つてやりな……」

皆　々「待つてやれ〳〵……」

高利貸「そんならお前達から拂ふて呉れるか」

乘　客「誰れが拂ふかえ」

高利貸「そんなら口出しするなえ」

ト行きかける。

植　山「モシ〳〵、貴方々々」

高利貸「何んぢやえ」

植　山「オヽ――切符を頂きます……」

高利貸「オイシヨ……」

ト切符を渡して、いろ香を連れて上手へは入ると、下手より慌たゞしく越谷はキヨロキヨロしながらいで來る。電車内より産婆は、

産　婆「モシ〳〵越谷さん〳〵、越谷さんやおまへんか」

ト此の聲に電車の方を見て、

越　谷「アツお婆さん、何に落着いて居るのやなア、今出かゝつて居るのぢや。サア早う來ておくれ〳〵」

産　婆「氣がつきましたか、ア、左様かいな」

越　谷「落着きないな、早う來て〳〵」

産　婆「そんなら之れへ乘りなされ、一緒に行きませう」

越　谷「爾うかオイ電車はん、早う出して〳〵」

ト車掌臺へ上りかける、

植　山「停電で御座います」

越　谷「停電……今日この日に停電さす奴が有るかいな、今家の嫁が子を産むのやがな」

植　山「貴方の方の御出産と、電車とは線路が違ひます」

越　谷「薄情な事を云ひないな……サア産婆はん降りんかいナ納りないな……」

ト産婆を引摺り降す樣にして降ろす。此の時下手より自轉車に乘りて馳け來る。越谷は矢庭にハンドルを捕へる、

小　僧「無茶しなはんないな、何にをするね」

越　谷「濟みまへんが一寸貸しとくなはれ」

小　僧「無茶言ひなはんないな、急ぎまんねがな」

越谷「イヱ私處の親子二人の命に關りまんね」

小僧「人の命には代へられまへん、サアお使」

越谷「大きに有難う、サア産婆はん之れに乘つて」

産婆「ハイ〳〵」

ト自轉車に乘りかけて引くり返る、

産婆「私やよう乘りまへんがな」

越谷「ア、難儀やな」

ト焦々しながら、産婆の手を取つて走り入る。小僧は

小僧「狼狽者やな」

ト上手へは入る。同時に工夫は下車をして……、

工夫「動きます」

ト下手へ行く。

皆々「オイ動くのか……」

工夫「イヱ私の體が」

ト云ひ捨てゝ下手へ入る、

無賴漢「馬鹿にするなえ、オイ怎ふなるのぢ、オイ〳〵オイ〳〵」

田中「オヽイヽヽ」

ト運轉手臺より振向きながら返事する、無賴漢は傍へ行き……、

無賴漢「怎うなるのぢやい」

田中「何がだんね」

無賴漢「何が……電車ぢやい」

田中「電車は之れだすがな」

無賴漢「電車は判つてるわえ。出すのか出さんのか怎うするぢやえ」

田中「サア……」

無賴漢「サア……便り無い奴ぢやな、一遍降り……」
ト田中を運轉手臺より引張り降して、
無賴漢「われ便りない奴ぢやな、皆急ぐさかい乘つて居るのぢやないかい」
田中「爾うだすな」
無賴漢「爾うだすなとは何んぢやい、動くのかい動かんのかい」
田中「電氣が來たら動きます」
無賴漢「こたへん奴ぢやな、われ呼吸が通うとるのかい」
田中「サア……通うてますやらうかいな……」
無賴漢「われ日本人か何處の奴ぢや、いたらうか」
ト拳を固める。此の時植山傍へ來り、仲へ割つて入りて、
植山「アヽモシ、運轉手は何等乘客に直接の關係が御座いませんから、御質問が有れば車掌からお答へを致します」

ト片足を前に出して、變手古な形をして前に立つ。
無賴漢「そんなら判る樣にせんかえ」
植山「何をです……」
無賴漢「何をッ……何をて電車やないかえ」
植山「電車を怎うしますので」
無賴漢「怎うするて出さんかい」
植山「電氣が來たら出します」
無賴漢「其麼無責任な奴が有るかえ、電氣が來なア、こん樣に、何んとかせんかえ」
植山「何んとかせんかいて、電車は人の力では怎うも出來ませんので……電車は電氣の力、人力車は人の力、馬車は馬の力……停電で御座います」
無賴漢「其麼事は聞かいでも判つてるわい、夫れなら夫れで會社へ電話でも掛けんかえ」

植　山　「掛けてゐるんですが、電氣が來なけりや仕方がないのですから」

無賴漢　「何にッ〳〵」

ト意氣込むを止めながら、

植　山　「モシ〳〵、貴方御一人ぢや御座いません、皆樣も待つて居られるのですから……」

無賴漢　「皆が溫順いから、俺が云ふのぢや」

ト益々意氣込む故、植山は無賴漢の胸の處へ一寸手を當てゝ、モシ〳〵と言譯をせんとするを、

無賴漢　「ヤイ何に手を出しやがる」

ト矢庭に車掌の横面を打ん毆る、

植　山　「アヽ、痛い〳〵」

ト横面を押へながら、半泣きになつて、

植　山　「亂暴な眞似をするな、人を打つと云ふ奴が有るか……サア來い」

ト虛勢をはる、

無賴漢　「何に……」

ト意氣込む、田中は洋服の尻をまくりて加勢に來る。監督は止める。既に喧嘩とならんとする處へ、電車內より職人いで來りて、仲へ割つて入り双方を止め、

職　人　「まあ〳〵宜ぢやねえか」

無賴漢　「ほつといて吳、ヤイ〳〵」

職　人　「まあ〳〵宜いぢやねえか、何も電車が動かねえからつて、車掌を打つても仕樣がねえぢやねえか。何も車掌の所爲ぢやねえんだから」

無賴漢　「お前はん何んや、餘計な處へ口を出すなえ」

職　人　「だつて見て居られねえから、口を利くのぢやねえか」

無賴漢　「誰が賴んだい、誰れに賴まれて口出をするのぢやえ、變手古な奴ぢや」

職人「まあ〳〵爾う怒るもんぢやねえや」

無賴漢「怒つたら怎うしたい、鼻糞め……」

職人「オイ餘り利いた風な事を云ふな」

無賴漢「云ふたら怎うしたい、ヤイわれ俺を知らんな俺ら一寸此邊で煩い者やで」

職人「煩さいのが怎うしたんだい」

無賴漢「手前・俺を知らんな」

職人「手前の樣な奴知るか……大概にしろい、唐變木め」

無賴漢「何に、唐變木とは誰れの事ぢやい」

職人「手前の事だい。贅六め」

無賴漢「贅六が怎うやね、江戸ッ兒は偉い者やな。俺れを知らんか、俺れは一寸煩い者ぢやい、化物め」

職人「ヤイ大概にしろ・車掌と相手が違ふぞ。向先きを見ろ、多摩川の水で產湯を使つた兒さんだい、誰だつて毆られりや痛いのだ。我が身抓つて人の痛さだ」

ト突然に横面を張り飛ばす。此の欄幕に無賴漢は稍々躊躇して、横面を兩手で押へ暫く眺めて居り、

無賴漢「ヤイ貴樣・俺の横面をガンと毆つたな。偉いもんぢや、われ何處の奴ぢや俺ら煩いもんやぞ……」

ト尻をからげる、職人は此の體を見て、

職人「おゝ喧嘩か、面白いや、喧嘩は本場だ」

ト之れにて双方羽織を拔ぎ捨てゝ搦合となる。植山、田中は仲裁に入る。監督は組合居る仲へ割り入りて赤旗を振る。此の時上手より撒水夫、車を曳ひていで來りて、

撒水夫「あぶない〳〵」

ト云ひながら兩人の中を車を曳いて通る。羽織に水のかゝるを見て一同は、

皆々「アヽ羽織々〳〵」

停　電

ト云ふ。此の聲に兩人は手を放して羽織を拾ひ、着かけて互に羽織の間違ふて居るに心附き、双方頭を搔きながら小腰をかがめて羽織を取替る。此の内撒水夫は花道へはいる一同は呆氣に取られて皆々電車より降りて、植山に切符を戻して三人は花道へ、二人は假花道へ行きかける、と同時に洋樂様の囃子になり、花道より令孃立派なる拵へにて水の滴たる美人靜にいで來り、本舞臺へ來りて無言にて電車に乘る。五人の者は令孃に見惚れ居る時、電氣來る。

植山「動きます……」

ト綱を曳き鈴を鳴らす、之れにて五人は走り戻り、電車に乘らんとする時、發車する。飛び乘らんとするを植山、田中の兩人は、危い〳〵と制す。五人は呆然とする。此の模樣よろしく洋樂にて、

滿來

當りくじ

【三場】

當りくじ

(1) 尾張屋店先きの場
(2) 高津松雲寺玄關の場
(3) 初湯稲荷神社の場

登場人名

手代	伊助	五六	【俳優】
同番頭	和助	林蝶	
飯焚	おたけ	小時	
信濃屋源兵衛	七五樂	蝶七	
尾張屋五兵衛	七五郎	龜鶴	
手代	清七	大磯	
尾張屋娘	おいと		

上州屋作兵衛	龍雄	蝶六	
松雲寺住職信念	丸の	蝶太郎	
番僧	杢	壽	
同	德利兵衛	笑將	
講中	喜兵衛	三郎	
同寺男	太助	五鶴	
同	吉造	花菱	
講中婆	おく	蝶八	
同	おたつ	小次郎	
門番	平助	一郎	
同	與八		

當りくじ

(1) 尾張屋店先きの場

本舞臺二重通り上手正面土藏、其前廊下にて上手へ通じる、中央腰高欞子の奥へ通じる出入口、上手質屋の戸棚、其の上に大神棚榊、燈明等種々有る、下手に五ツ六ツの定紋附き提灯箱を並べ、其の上に商賣の帳面種々、諸國狀差し等、其の前に大帳場格子に帳箱、硯箱等、中央に八方を降ろし、座蒲團、店火鉢等下手臺所へ通じる出入口に茶暖簾に『尾張屋』と染め抜き其の下手正面の出入口に荒格子用水桶等、入口の前に紺暖簾に(質)の字を染抜く總て質店の體此の模樣誂への囃子にて幕開く。

ト幕の内より伊助、和助の兩人澤山な流質の衣類を双方より疊みつゝ襟元のエフ札の金高を讀み上げて居る、帳場格子の前に番頭友七は大番頭の拵へにて算盤を手にして居るド、友七は金高を讀む、伊助、和助は算盤を持つ。

友七「ヱ、願ひましては一兩三分。ヱ、お次は一朱と百五十文」

ト宜しく勘定なし居る處へ中暖簾の臺所口より飯焚お竹下女の拵へにて襷がけにて出で來り目顏で友七を呼ぶ、友七は折惡しとの思入にて口に出鱈目の金高を云ふ、お竹の前に來りて手眞似で彼方へ行けとの思入れ、お竹は厭やとの科し、伊助、和助の兩人は此樣子に氣が附いて兩人は見てツツと笑ひながら見て居る、友七は口には金高を讀み上げながらお竹に手を取られて二重より落らる、平氣な顏をして、

友七「ヱ、願ひましては……」

伊助「店から落ちて」

和助「お怪我はないか」

友七「ヤイ〳〵人に讀まして置いて、算盤を下へ置いて何にをして居るのぢや」

伊助「私より貴方が何にをして居なさるのぢや、店から落ちて何處もお怪我は御座りませぬか」

和助「若い者を傍に置いて痴話三十二の口説の數々へ、、、お樂しみで御座りま

すなあ」

友七「ヤア知つて居るのかえ」

伊助「知つて居まへいで、二二天作二人の中は店中で知らぬ者がおますかいな」

お竹「ヲ、恥しやのう」

伊助
和助「ヨウ〳〵友七さんの色男々々」

友七「ヲイ〳〵宜い加減にして呉れ奥へ聞えるわい、ツイ冗談から駒が出て出來心の撮み喰ひ何卒旦那に内々でなア」

お竹「何んの知れても良いわいなア、鬼と噂の恁麼内に奉公するのもお前が有るゆゑぢや、知れてお暇が出たら幸ひ、私しの在所で暮そういなア」

友七「厭やぢやがな、阿呆らしい」

お竹「そんなら私を欺したのかえ」

友七「欺した譯けぢやないが、ヤイ〳〵二人共羨ましそうな顏をして、恁麼話を聞いてる阿呆が有るかい、早う臺所へ行つて飯を食べてこい、商人は少し氣が利かんとあかんぞ」

伊助「ヘイ〳〵氣を利かして臺所へ行うか、恁麼事を見て居ては商人になれんそうぢやわい」

和助「當り前ぢや、末は頭禿がして女中とちゝくり合ふて、別家前に足袋屋の看板足上りぢや」

友七「誰れの事を云うて居るのぢや」

和助「イヱ此奴の事で、ナア伊助はん」

伊助「ヘ、、、、、何卒ごしつぼりと」

ト兩人笑ひながら中へはいる。

友七「おいお竹どん店のはなで變な事を云うて呉れない、手代共の手前も面目ないわい、若しも旦那に知れたら大目玉ぢやがな」

お竹「何んの旦那が怖いかいな、お前私を欺したのやなア」

友七「何んの欺すものかい、何づれ時節が來たら夫婦になるわい」

お竹「いえ〳〵嘘ぢや〳〵お前内のお嬢様に惚れて附文までした事もチヤンと知つているぞえ」

友七「シツ〳〵」

お竹「何にがシイ〳〵ぢやいな、あの此處な浮氣者めが」

ト胸倉を取るを友七は振り拂ふて捨白詞にてお竹を押へ附ける途端、下手より信濃屋源兵衛町人袴小紋の紋附、手に白へぎに目錄を載せて袱紗をかけたるを持ちて出で來りガラリと入口を開けて中に入る、此樣子に三人はハツと氣味合。

源兵衛「今日は……」

友七「イヨ——信濃屋さんサアまあお上り」

源兵衛「へ、、、、何にをしておいでぢやな」

友七「エ、。ヘエ——何んぢや差込みが來たと云ひましたので、朋輩同士で一寸押へて遣りましたので、これ少しは納まつたかえ」

お竹「何んの納るものかいな」

友七「これ〳〵此處はお店先ぢや、御客樣も有るゆゑ奥へ行て氣を靜めて寢て居なされ」

ト目顏で知らす、お竹は無言の儘友七を抓ねる。

友七「アヽ、痛い……」

源兵衛「怎うなされたのぢやがな」

友七「私も差込んでますのぢやがな」

ト誂への囃子にてお竹は思入有つて奥へ這入る。

源兵衛「友七さん差込むようなら押へて上げませうか」

友七「イヱ滅相なモウ治つてをりますのぢや」

源兵衛「癪に嬉しき男の力、頭禿げても浮氣は止まぬ、お樂しみ中御邪魔をしますなア」

友七「イヤ……御苦勞人の信濃屋さん・貴方の目にかゝつては、助かりません わ、何卒世間へ内々でなあ」

源兵衛「大丈夫羽織の紐」

ト胸を叩く。

友七「サア何卒お上りなされませ」

源兵衛「夫れでは御免なされませ」

ト捨白詞にて二重へ上る、

源兵衛「旦那さんは御宅かいな」

友七「ハイ只今土藏で流質の御調べで御座ります」

源兵衛「中々能く働くお方様ぢやなア」

友七「イヤモウ働くと云うよりは、此世へ金の番人に產れて來た樣な御方でなア 有り餘る身代に三度の内二度まではお芋のお粥、尾張屋の奉公人はだん〳〵顏へ筋が出來て、不思議に芋に似て來ますなア」

源兵衛「イヤ〳〵金持と灰吹は溜る程穢いと人が云ひますわい、夫れにお糸樣のような美くしい娘御が產れたのは、上本町の七不思議の一ツぢやがな」

友七「サア〳〵瓜の蔓には茄子はならぬと云ひますが、何んの事はない、内の嬢さんはお芋の蔓に咲いた百合の花、不思議なもので御座りますわい」

源兵衛「サア其のお糸さんの事で一寸參りましたのぢや、旦那樣に爾う云うて下さりませぬか」

友七「ヘイ〳〵畏りました」

ト立上り藏の中を見て、

友七「旦那樣信濃屋さんが見えまして御座ります〳〵」

五兵衛「ヲ、左様か今行きますわい」

友七「ハ、、、信濃屋さん芋が物を言うて居ますわい」

源兵衛「シツ〳〵」

ト押へる、藏の中より五兵衛因業なお爺の拵へ、手に帳面と算盤を持ち出で來る。

五兵衛「ヲ、これは〳〵信濃屋さんようこそ〳〵、サア〳〵何卒此方らへ」

源兵衛「へヱ〳〵御忙がしい中へお邪魔を致します」

五兵衛「イヱ怎う致しまして、これ友七御座蒲團を出さんかい、ヱ、モウ一寸目をはなしますと、取り散らけて……少し片附けて置け、店の束ねをする番頭が其麼事で怎うするのぢや。信濃屋さんあれで五十二の御姿で御座りますわい」

源兵衛「中々お若う見えますなア」

友七「へ、、、、有難う御座ります」

源兵衛「何にを禮を言うて居るのぢや、阿呆の數が知れわい、ヤイ其處へ座れ癇の立つ奴ぢやなア」

源兵衛「まあ〳〵宜しう御座りますがな、そう癇をお立てなされますな、ヲ、額に筋が出て御座りますがな」

五兵衛「へヱ直ぐに癇の筋が立ちますのぢや」

源兵衛「ハハ、、、、丸で芋ぢやがな」

友七「イヨ――大當り」

五兵衛「何にが大當りぢや、早う片附けぬかい」

友七「へヱ――」

ト跳への囃子になり衣類を取り片附る。

源兵衛「偖て昨夜は失禮致しまして御座ります、若狹屋さんも大喜びで善は急げと申しまするで、仲人役の私に早う結納を納めて呉れいと、態々お約束のお金を持つて見えましたで、幸ひ今日は日柄もよし、略儀ながらの結納金、何卒お納め下さ

りますように。ヘエお芽出度う御座ります」

ト、ヘギ臺を前に出す。

五兵衛「これは〳〵御叮嚀様に、ハイ頂戴致しますで御座ります」

ト小判の封を切つて改める。

友七「若し信濃屋さん、御結納とは何誰の御結納で御座ります」

源兵衛「サア今度及ばずながら私の仲人で若狭屋の旦那が、御當家の嬢さんの、御養子に見えます事に極りましたのぢや」

友七「ヘエ……」

ト手に持つ算盤を落す。

五兵衛「エツ喫驚した。何にをして居るのぢやい」

友七「ヘエ……あの旦那様、お嬢様の御養子が見えますのかいな」

五兵衛「サア今度縁有つて若狭屋様が見えるのぢや、お前方にも改めて披露はする

が、其の積りで居て下されや」

友七「ウン――」

五兵衛「何にを唸つて居るのぢや」

源兵衛「友七さん又差込みかな」

友七「今度はほんまの差込みぢや」

五兵衛「餘り喰ひ過ぎるからぢや、サア奥へ行て娘に茶を持つて來いと云うて來い」

友七「ウ――ン――」

五兵衛「ウンと云う返事が有るかい、ヘエと云へ」

友七「ヘエ――」

ト呆れた科にて奥へはいる。

五兵衛「慥に結納金五十兩受取りまして御座ります、爾うして持參金の五百兩は、何時頃頂戴出來ますな」

源兵衛「へヱ何分大金の事で御座りますで、若狭屋さんもあの家倉を金に代へて、夫れを持つてお養子に見えますのぢやで、モウ半月位ゐは掛りませうと思ひますわい」

五兵衛「成るだけ早うして下さりますように、餘り手間が取れますと又外から良い口が有りましたら、其處は商人の事ぢやで高札へ落して仕まひますでなア」

源兵衛「丸で骨董物の入札で御座りますがな」

五兵衛「今の商人は此の位にせねば、引合ひませぬわい」

源兵衛「夫れでも今時五百兩からの持參金を持つて、養子に見えるとは、一寸外に御座りませぬなア」

五兵衛「夫れはお言葉通りぢや、皆お前様のお骨折り、お禮は何卒しつかり先方で貰うて下さるように、あゝ有難い〳〵之れも日頃から信心する初湯稲荷様の御利益ぢや、初湯稲荷大明神〳〵」

（ト柏手を打つ、此の時奥より娘お糸、

お糸「ハイ只今持つて參ります」

五兵衛「アヽ娘が感違ひして居ますわい」

二人「アハヽヽヽヽ」

（ト跳への囃子になり、お糸振袖姿の娘の拵へにて盆に茶を載せ出て來り、

お糸「信濃屋さん宜うこそお出でなされました、サアお茶一ツ」

源兵衛「イヨ――何時も綺麗で御座りますな」

お糸「あれ厭やで御座んすぞえ。ヲヽ父さん之れは御結納の目錄かえ」

五兵衛「爾うぢや愈々お前の御養子が極つて來月早々婿さんが見えるのぢや」

お糸「ヒヱツ――」

源兵衛「御存じの若狭屋の十兵衛さんが、御養子と極りまして、御芽出度い事で御座ります」

お糸「エ、モウ止めて下さんせいな」
ト盆を投げ捨てゝツンと上手へ足早に這入る、五兵衛は源兵衛の煙草入で莫を吸うて居る。

五兵衛「ハ、、、、、とんとまだ子供で御座りますわいな」
源兵衛「モシ今の様子で大丈夫で御座りますかいな」
五兵衛「ヘイ〳〵大丈夫共〳〵、心で嬉しいと思うても、厭やぢやと言うのが娘の値打、貴方も苦勞人に似合ぬなア」
源兵衛「夫れなれば宜しいけれど、私たしも仲人役、暇潰して若しや此の縁談が、成り立たねば」
五兵衛「先きから禮金が取れませんかいな」
源兵衛「ハア蛇の道や、蛇ぢやなア」
五兵衛「盜人の晝寢も當てが有るなア」

源兵衛「へ、、、、、親切ごかしの仲人も、矢張りレコぢや〳〵」
ト指で○を拵へる。
五兵衛「信濃屋さん、こけても無代起きんな」
源兵衛「でもお前さんには叶わぬわい」
五兵衛「イヱ怎う致しまして」
二人「ハハ、、、、」
ト此の時お糸再び上手より出て凝然と聞いて居る。
源兵衛「夫れでは早ふ若狭屋へ、此の譯言うて一日も早う、持參金の方を附けて貰ひませう」
五兵衛「まあご緩くりお茶漬でもと申上げたいが、善は急げぢや、早う行つて來て下さりませ」
源兵衛「ヘイ〳〵其れでは、之れで御暇致します」

ト捨白詞にて立ち上り莨入をさがす。

五兵衛「何んぞ知れませぬかいな」

源兵衛「ハイ私しの莨入が……」

五兵衛「はてな、今其處に有つたのに」

ト共に探す内源兵衛は五兵衛の持て居るを見て、

源兵衛「モシ夫れは貴方の莨入かえ」

五兵衛「イヱ一寸一服よばれてゐますのぢや」

源兵衛「夫れを探して居ますのぢやがな」

五兵衛「あゝモウ年を取りますとな、へゝゝゝ、御馳走樣」

源兵衛「イヤモウ迚ても貴方には叶ひませんわい」

二人「ハハゝゝゝ」

ト囃子になり源兵衛は捨白詞にて下手へ這入る、同時にお糸はツカ〳〵と出て以前の結

納を持つて下手へ行きかける、五兵衛は驚いて。

五兵衛「これお糸お前夫れを持つて何處へ行くのぢや」

お糸「何處へ行くとは餘りな、なんぼ親の威光ぢやとて、心に染まぬ婿定め、私は厭で御座んす、此の結納を若狹屋へ、突き返しに行くのぢやわいな」

五兵衛「ヱゝ何にを吐すのぢやえ、親が極めた緣談を厭やがるさへも不孝者ぢやに、娘の身で結納を我が身で返しに行こうとは、親はそれほど蓮葉にや育てぬあのこゝな不孝者め」

トポンと下に置き。

五兵衛「叱るのやないわい〳〵」

ト猫撫聲で云うを訛への囃子になり下手より手代清七二枚目の手代の拵へにて手に小さき風呂敷包を持ち出で來り内の樣子に不審たて表の暖簾の内にて聞いて居る。

五兵衛「之れが澤山に有る子供ぢやなし、天にも地にもお前一人憎い筈はないわい

可愛いけりやこそ良い婿もと親が極めたのに有難いとも思はずに、何んぼ母親の無い子供でも餘り氣儘が過ぎるわい、親の爲には昔しから苦界へ身を沈める娘も有るわい」

お　糸「サア其の孝行を知らんでも御座んせぬが、尾張屋の店に草が生へて、お前が其の日の生活にでも困る樣になつたなら、何んの苦界も厭ひませう、有り餘る程の身代に持參金附きの婿貰うて、あれ見よ慾の皮の張り詰めた、揃ひも揃うた鬼の親子と、世間樣から笑はれては、私は我慢をする氣でも、親に不孝になりますわいな」

五兵衛「其麼不孝ならチツトも構はん、佛と言はれては金はたまらぬ、金の無い奴の負惜しみぢや、惡う云う奴は言はして置け、何んと云うても若狹屋を婿に極めて居るのぢやわい」

お　糸「其れでも父さん若狹屋に其麼息子が有つたのかえ」

五兵衛「息子ぢやないわい、若狹屋の主人ぢや」

お　糸「主人と云へば、向うの伯父さんかえ」

五兵衛「爾うぢやがな」

お　糸「エ、モウ父さん大抵になさんせ、先は幾つで御座んすえ」

五兵衛「慥に私と四ツ下かな、サア其處が親の慈悲ぢや、五百兩からの持參金持つて來る爲に、店を閉めて此處へ來るのもお前が可愛いさぢや、其處がお前が辛抱一ツ、モウ先も長い事は無いわい、丸々添うて五年か六年、人の壽命に限りは有るわい、夫れとも持參金さへ持つて來て、三日でも夫婦になれば、お前が氣儘八百で振つて〳〵振りたふせ、いづれは先も氣不味うなれば、其處で離緣話しも持出せる、其の後へ又持參金附きの婿を貰うわ、內の身代は益々殖えるわ、其れでこそ尾張屋の大黑柱ぢや」

お　糸「父さんお前正氣で御座んすかえ」

五兵衛「私が變に見えるかい」

お　糸「あい見へまするぞえ、餘り稲荷様の堅ごりは、惡いコン〳〵様でも憑たのでは御座んせぬかえ、勤めする人にも操が有るに、親が勸めて幾度も、持參金附の婿を取れよとは、夫れが眞面目で云へる事かいな、何んぼお金が欲いとて命と頼む女の操とお金とどちらが大切ぢやぞえ」

五兵衛「ヱ、其麼事吐かさずとも知つて居るわい、金は高利で人に貸せるが、女の操に利子が附くかい」

お　糸「サア夫れ程大切の黄金でも、不時の災難には消えて行く、女の操は燒かれても、假令我が身は爛れても、色も變へぬが女の自慢、地震雷火事でも燒けぬ、お爺位はドンと來いぢや」

五兵衛「ヤツ吐したなア」

ト算盤片手に立ち上る、此の時清七ツカ〳〵と二重へ上り五兵衛を止めて、

清　七「若し旦那様、人出の多いお店のはなで、はしたない眞似をなされますな、まあ〳〵お待ちなされませ」

五兵衛「ヲ、清七か捨てゝ置け、あれが生娘の云う事か、地震雷なんのその、お爺位ひはドンと來いとは」

清　七「サア〳〵其れもほんの言葉のはづみ、まあ〳〵私にお任せなされませ」

ト下に置く、お糸は清七と目で互に仕方をする。

お　糸「清七や父さんが無理計り、私しの心に染まぬ婿定め、モウ結納まで來て居るのぢや。これお前も何卒狼狽へずに、しつかりしておくれいなア」

清　七「ヘエ——私が附いてゐますからは大丈夫で御座ります」

お　糸「宜いかいなア〳〵お前が便りで生きて居るぞえ」

五兵衛「こらツ變な事を吐すない、現在親が傍に居るのに、小僧上りの清七を、便りにするとは何事ぢや、何處まで阿呆やら判らぬわい」

お　糸　「サア其處が盲目の垣覗き、金に目のない父さんが、人の心が判るかいな」

五兵衛　「判らぬとは誰れの心がぢや」

お　糸　「私の心とお前の心、まだ神様に通じぬのかいなあ」

ト清七を凝然孤めて、清七は痛さを堪へて居る、五兵衛は氣の附かぬ風にて、

五兵衛　「何の通じぬ事が有るかい、日頃から信心する初湯稲荷様の御利益で・恁麼結構な縁談が纏つたのぢや、何んと吐しても若狭屋さんを養子に貰うのぢや」

お　糸　「夫れ程欲しけりやお前が貰ひなんせ、若狭屋さんのあの頭と・父さんの其の頭と恰度の似合の茶瓶が二ツ、水も洩らさぬ茶瓶の鑄掛・私しや高見で見て居るわいな」

五兵衛　「おのれ何處まで親を阿呆にするのぢや」

清　七　「はてまあ〳〵お待ち遊せ、此の場は私にお任せ下さりませ、決して悪うは致しませぬ、互に恁うして言ひ募つて居られましては、附く話も附きませぬ、サアお嬢様貴方は傍の間で御稽古をなされませ　はて聞分けのない。お行でなされませといふのに」

お　糸　「それでも怎うやら……」

清　七　「はて　氣儘も宜い加減になされませ」

お　糸　「お前怒つて居るのかえ」

五兵衛　「怒らいでかい、當り前ぢやわい」

お　糸　「腹が立つたら」

ト宜しく氣を換へて、

お　糸　「堪忍え」

ト誂への歌になり清七と目で仕方を宜しく有づて奥へ這入る。

五兵衛　「イヤモウ母親のない子は仕方がない、怎うぢや今の態は、丸で子供ぢやがな」

清七「サア〳〵其處が大家のお嬢様の値打、上本町切つての小町娘と、評判のお嬢様、一寸表で聞きましたが、人も有らうに若狭屋さんを御養子とは、之れは旦那様も考へもの、假令五百兩の持參金が有るとしましても、丸うは不可ますまい、夫婦和合は家繁昌、好いた花婿を貰うてお上げなされますのが親御の慈悲なり御店の御爲め」

五兵衛「ヤイ〳〵生意氣な事を云うない、ツイ近頃まで二本垂らして、まだ前髪の跡の有るお前抔が、夫婦和合も荒凉じいわい、柄にも無い事吐さずに、臺所で粥でも喰つて來い」

清七「イヱ決して御意見の何んのと勿體ない、其麽氣で申上げたのぢや御座りませぬど、矢張り御店を大切と存じまして」

五兵衛「ヱヽ、人間並な事を吐すない、夫れは一人前の人間の言う事ぢや、まだ貴様等は尻に玉子のかけがついて居る、人間の雛子め」

清七「サア其の雛子の泣聲も又親鳥の泣聲も、御店を思ふ心は一ツ、泣く音に變りは御座りませぬ」

五兵衛「吐すな雛子ビー〳〵、親鳥は時を知つて立派にコケコーと泣くわい、雛子は裏へ行つて青菜でもつゝいて來い、思案の邪魔ぢや彼方へ行け〳〵ビイ〳〵」

清七「ハイ〳〵ビイ〳〵、どれ餌について參ります。然し折角御相談を受けた若旦那、千兩の持參金で内のお嬢様の御養子と、あれほどまでのお話も、コリヤ斷つて來ねばならぬわい」

五兵衛「何んぢや、内の娘に千兩の持參金附の婿が有るとの話でも有るのかい」

清七「よしや其麽話が御座りましても、多寡が雛子のビイ〳〵話し、一寸斷りに參ります」

ト立上りて下へ降りる。

五兵衛「まあ〳〵清七。へゝゝゝ、何んと言うても店中の利け者、番頭の上越す仕